

## II. 第11次調査出土遺構

### 1. 台地部の遺構

#### (1) 台地部遺構の概要

台地部で調査した遺構のほとんどが、谷東側の台地上に分布する。登録するものの935件のうち、柱穴・小穴とするものが733基で、大多数を占める。登録数でいうと、次いで溝62件、不整な土壙63件、掘立柱建物48棟、土壙26基といった構成となる。このうち、掘立柱建物は、上記柱穴を構成単位とするものである柱穴と小穴の別について、柱穴は柱痕跡・圧痕等によりそれと確認できたもの、掘立柱を構成することによりそれと分類したもの、さらに形状・規模で分類したものがある。その点土壙としたものと相対的な区分となっている。小穴とするものはそれ以外の小形の掘り込みであり、登録したものは遺物出土があったものを基本としている。柱穴・小穴は調査区中程から南に主に分布し、特に南西部で最も密度が高く、大形の柱穴も顕著である(図9)。溝は、北の1基を除き、細く、弧状を呈するもので、調査区南半部に群在する。土壙とするもののうち形状不整で、他の土壙とする遺構とは質質な落ち込みが、調査区北端部に密集する。不整な土壙として報告する(図6・7)。

#### (2) 谷

厳密にいうと、台地上遺構ではないが、後掲する谷1203とは別の、第2次調査区から流れる谷の西岸部のみを調査したものであり、ここで報告する。

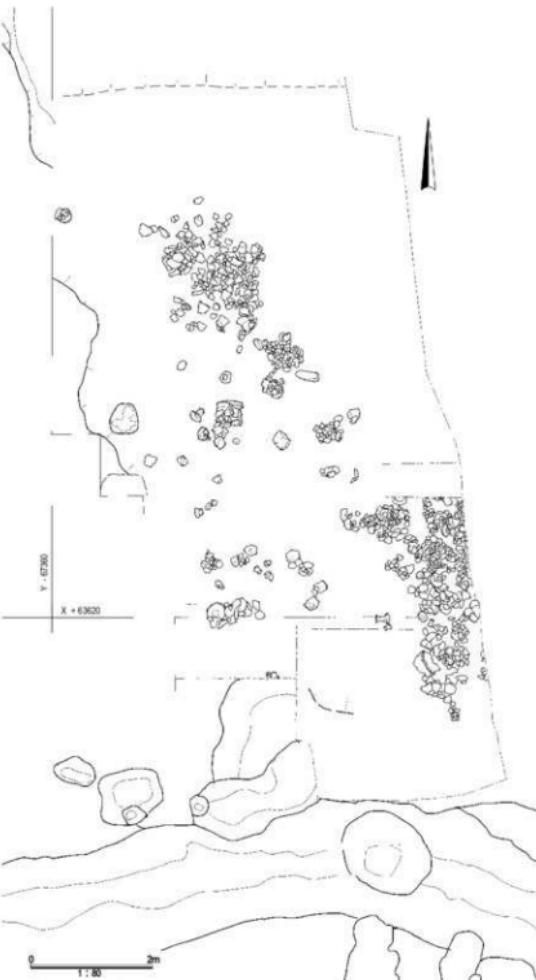


図16 谷1202 遺物出土状況実測図 (1:80)

谷1202 (図 16・19・断面 1 土層 1)

20)

調査区北東隅に位置する。東に接する第2次調査区の方向に沿って深く入り込み、北西方向へ向かう谷(2次調査区 SD100)の一部である。

この位置で推定幅は約15m近くある。西の谷(1203)と同様本来の谷底は砂礫層下に埋没しており、調査の基盤面はその砂礫層上部とする。西岸の台地部との比高は0.5mほどであり、本地点内で流れに沿つて、目視できる程度の勾配をもつ。後述する谷1203と同様黒褐色の、おそらく泥炭質のシルトで埋まっている。この層中に投棄された土器を主とした遺物が集中、出土する。

出土土器について、今回調査ではその量が膨大であることから、基本的な整理に追われ、接合作業等を部分的にしか進めることができなかったが、この地点についても一部の接合作業にとどまっている。その中で、細分化した大形の甕を全形に近いところまで接合できた。図に示す程度の密度であっても、全体の作業を行えば、相当数の復原は可能かと思われる。

土器は、重量にして625kg出土した。ほかに石錐・砥石・石杵等石製工具・器具が出土した。

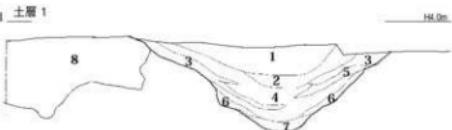
### (3) 溝

溝には、幅広で深いものと、幅が狭く、多くが弧状を呈し群集するものがある。前者について、今回調査では2カ所で検出した。その一方は、谷中に掘削されている。

溝1204 (図 17・18・21・22)

調査区北東部東壁から西へ伸びて調査区内で終わる溝である。東の第2次調査区の溝SD50から続くものである。2次SD50は西へ弧を描き、南端部も本調査区へ向かうが、調査範囲ではその延長を確認することができなかった。2次調査区から5m以内で終わるものと見える。

溝1204は、2次調査区からの方向で東壁から北西に伸び、すぐに屈曲、西方へと伸びて終わる。幅2.0m、調査区内での延長14m、深さ0.7mを測る。溝を埋める堆積層は主に粘土層で、灰色味が強く、レンズ状に堆積し、部分的に砂層を挟む。中位の層から土器がまとまった状態で出土した。下部、溝底には木質遺物がまとまって遺存していた。明確な形状をもつ木器は出土しなかったが、板状の加



- 1 黒灰化土 (10YR 4/1)。やや勧留。底。土器片を多く含む。
- 2 黄灰色粘土 (2.5Y 4/1)。粘土質。土器片ほとんど含まれない。
- 3 黄白色砂 (2.5Y 7/1)。全体的に粗な層かが、5mm程のものもある。和鉄鉱の付着が見られる。
- 4 灰色粘土 (2.5Y 4/1)。土器はほとんどなく、木質含む。
- 5 黄オーライー色の粘土質土 (3Y 6/2)。砂粒を多く含む。
- 6 灰色砂 (5Y 6/1)。砂は全体的に細かい。青灰色の粘土を少々含む。
- 7 黄色粘土 (7.5Y 5/1)。木質を含む。
- 8 地山の黄白色土 (2.5Y 7/2) (やや粘性) に、黒灰化土 (10YR 4/1) が混じる。

断面 2



- 1 黒灰化土 (10YR 4/1) が主。明黄色 (2.5Y 7/6) の地山ブロックを多量に含む。土器片含む。
- 2 黄灰色粘土 (2.5Y 4/1)。土器含む。
- 3 灰色粘土 (2.5Y 4/1)。木質含む。
- 4 黄白色砂 (2.5Y 7/1)。土器片含む。
- 5 黄白色砂 (2.5Y 7/1)。木質を含む。層内に木質を含む。層内に木質を含む。
- 6 黄灰砂 (2.5Y 6/1)。3mm以下の砂は層内に木質を含む。
- 7 黄灰色土 (5Y 5/1)。木質多く含む。
- 8 黄白色砂 (2.5Y 7/1)。3mm以上の砂は層内に木質を含む。46-603の6と同じか。粘土は含まれない。
- 9 黄色粘土 (7.5Y 6/1)。粘膜かく。木質含む。

図17 溝1204 土層実測図 (1:40)

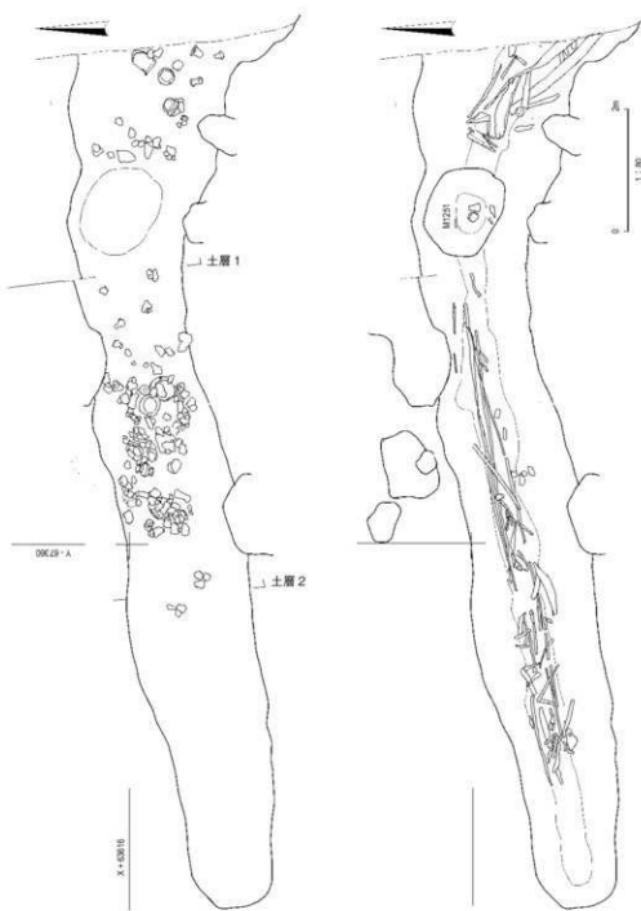


図18 溝1204実測図(1:80)

工材が顕著に出土した。なかに長さ4mを超えるものがある。溝の両端は閉じて、流水のない堆積環境であることから、意図的におかれた可能性が高い。土器類も層位的にまとまっており、投棄されたものが含まれているような出土状況である。重量にして265kgが出土した。大半は後期弥生土器である。ほかに銅鐵1点が出土した。



図19 遺構1202（南から）



図20 遺構1202 遺物出土状況（南西から）



図21 溝1204 遺物出土状況（東から）



図22 溝1204 実測（西から）

ている。

このうち、南西群とするのは、調査区南辺部近く、谷東岸に接する区域を中心に分布している。湾曲あるいは屈曲する溝が、部分的に交差して残されている。前後関係を考え、切り合いに注意しながら調査を進めた。覆土が黒褐色でほとんど性状の変異が認められず、覆土の様態での判断が難しい部位が多い。また、合流したような状態もみられ、接する位置の角の形状などにも留意して掘り下げた。

図23に溝のみを抽出して示す。溝には、調査区を貫くものあるいは、完全に閉じた形状となるものは見当たらず、弧状あるいは「コ」の字状といった形で分布している。この区域は、調査区内で最も柱穴の密度が高い範囲にあるが、溝がそれを囲んだり、掘立柱建物その他遺構を囲んでいるという関係は見て取ることができなかった。このことはほかの2群についても同様である。溝はその幅に比して深さがあり、その一部に土器片が密に出土する部分がある。比較的大きな破片を掲げ込んだような出土状況も見られた。また、相似形となるような溝が接近して設けられる例も目立つ。幅、深さとも変異があるが、幅0.2～0.3mの例が多い。深さは、深い部分で0.2m。

谷1203との関係を見ると、少なくともその最終段階で形成された肩部に分布する包含層を掘削しており、谷1203がほぼ埋積された後に掘削されたものと考える。

#### G46区北東群溝（図6・24・26～28）

調査区東壁に接して、隣接する第2次調査区へ続く。溝は形状が似ていずれも円錐の「コ」の字状を呈し、重弧状に重なる南北の2群で構成されているように見える。このため、南北群が重なる中央部では、溝が非常に複雑に交差している。2次調査区での状況は未調査部を挟んでおり、判然としないが、本調査区では完全に閉じた溝1452や、一部を切り欠いたような溝1338がある。柱穴の分布密度と一致するとはいえない様態である。

#### G46区北西群溝（図6・25）

調査区中央部、谷1203東岸に接した位置に群集し、柱穴の密集区域と一致する。弧状に収まるものだけでなく、逆方向に湾曲して群から離れてゆく方向の溝もある。谷部に向かい西へ伸びる溝2030はかなり低い位置まで続くことを確認した。また、一箇所から分岐するような分布も認められた。

溝1204 掘り下げ中に、重複して掘削された土壤と見られる遺構1251を検出した。

土壤1251（図18・21）調査区東壁寄りの位置、溝中央部で検出した。溝底より一段深く掘り込んでおり、その深さは溝肩部から0.9mを測る。覆土は、溝1204とほぼ同性状。平面形は橢円形状で長さ1.6m、幅1.2mと復原した。遺物は覆土中から弥生土器が小量出土した。

#### G46区南西群溝（図6・9・23）

溝1204以外の溝は、調査区南半部G46区に3群をなして分布し

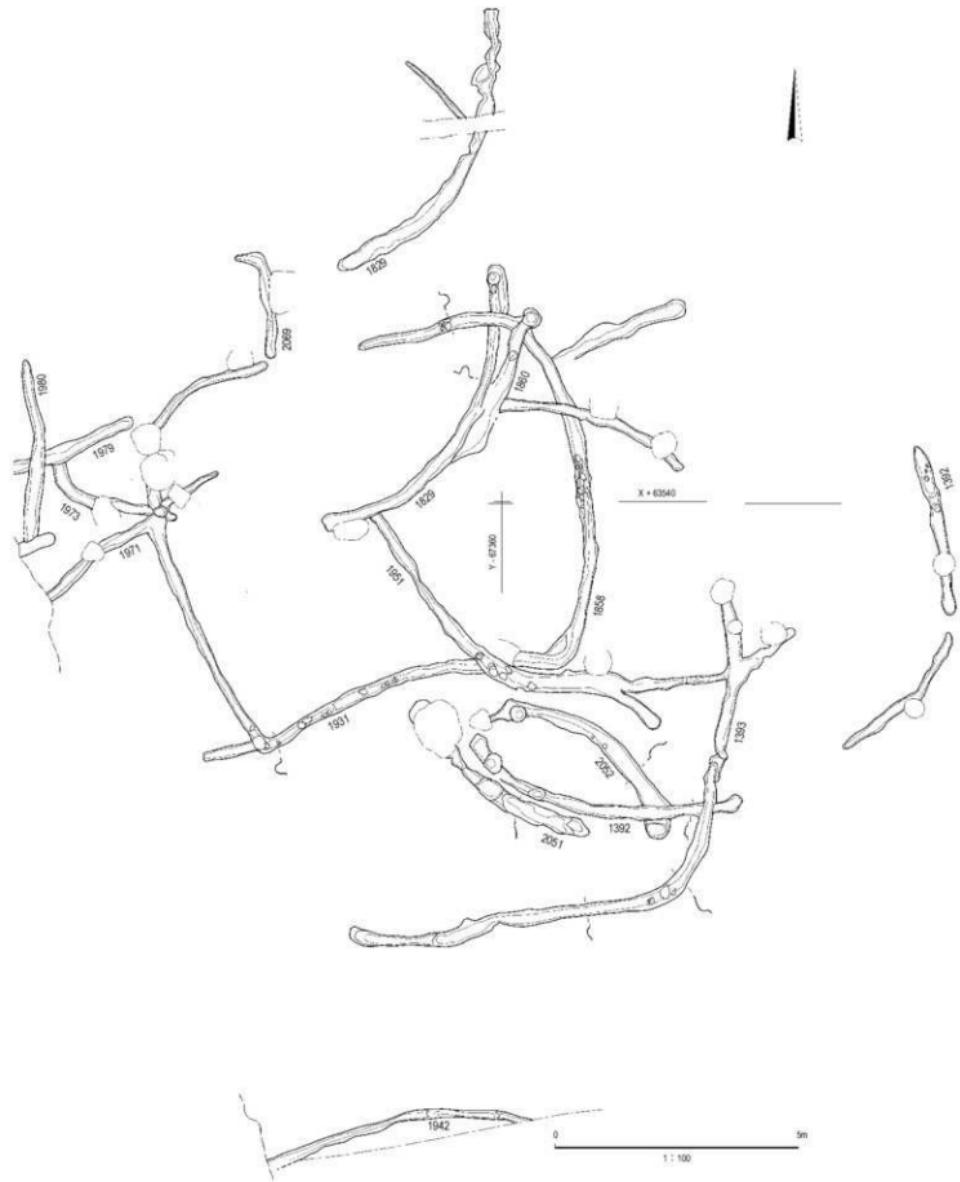


図23 滝集中部実測図(1) G46区西南部 (1:100)

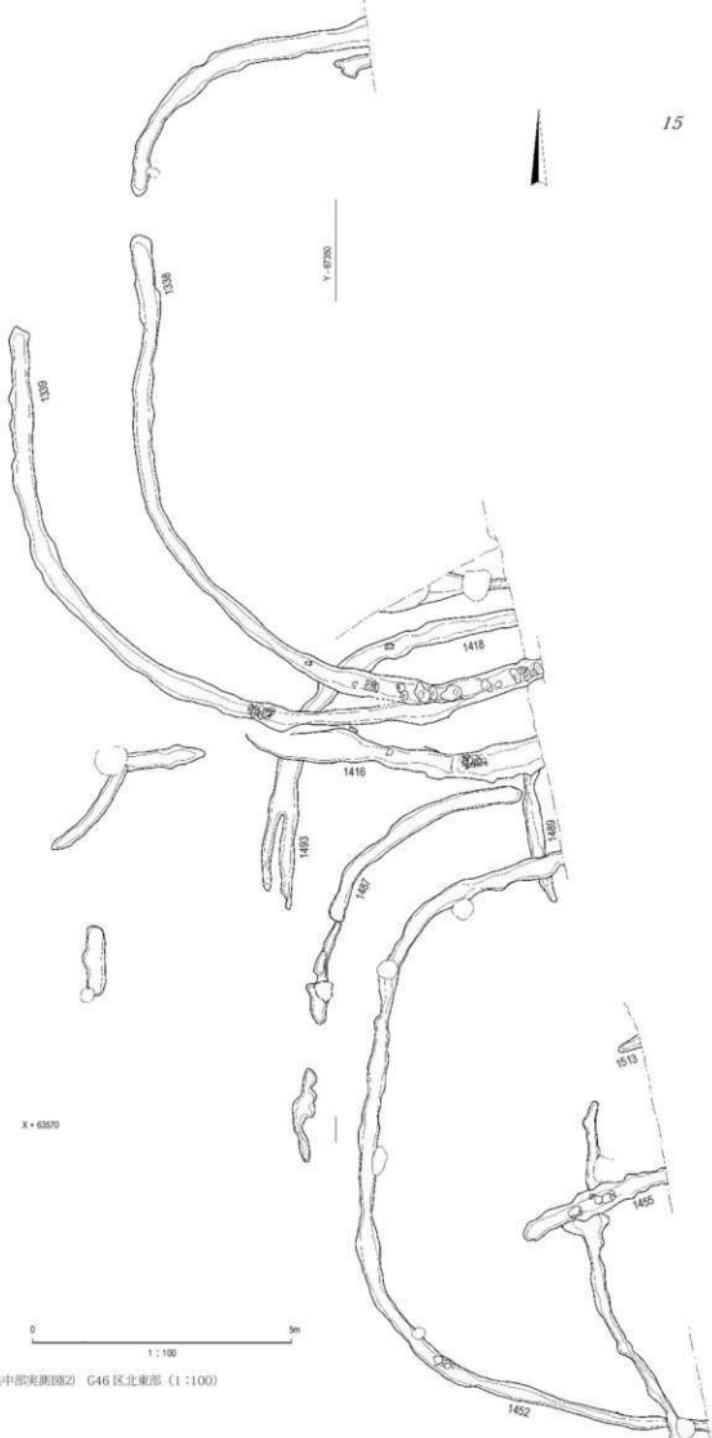


图24 满集中部寒湖园(2) G46 区北东部 (1:100)

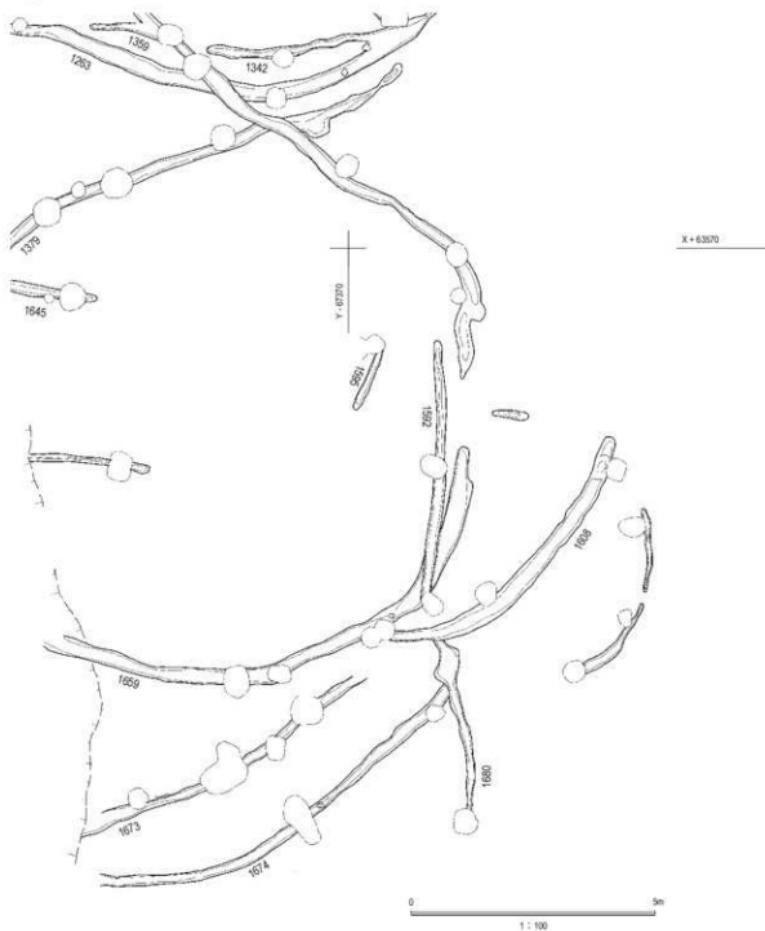


图25 满集中部奥陶统(G46 区北西部) (1:100)



図26 溝1452（東から）



図27 溝1338・1339（南から）



図28 溝1417・1418（東から）

#### (4) 据立柱建物

柱穴から48棟を復原した。このうち調査中、現場で確認して復原したものは12棟で、それ以外は図面整理の後、図上で復原したものである。

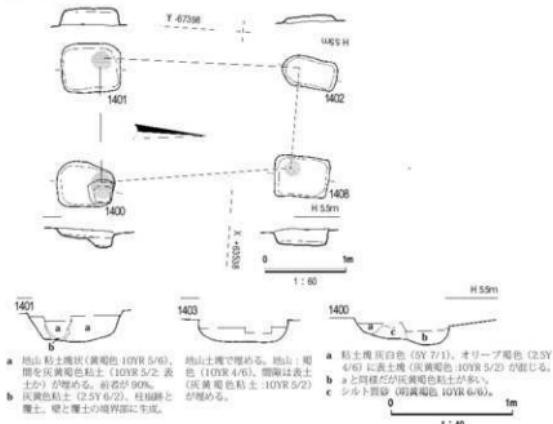
掘立柱建物とした中には柱穴の形状、平面規模、深さ及び配置から、それ以外の組み合わせを想定できないものと、そうでないものがある。また、ここで復原するうちの多くが1×1間の構成であり、柱穴の密度が高い場合、建物として組み合わさる確率が高くなる。そのようなものも含め、ここで報告する。

建物は調査区のうち、谷1203東岸台地上のG46区に分布するものが殆どである。さらに北、中央西、南の3群のまとまりをもつように見える。

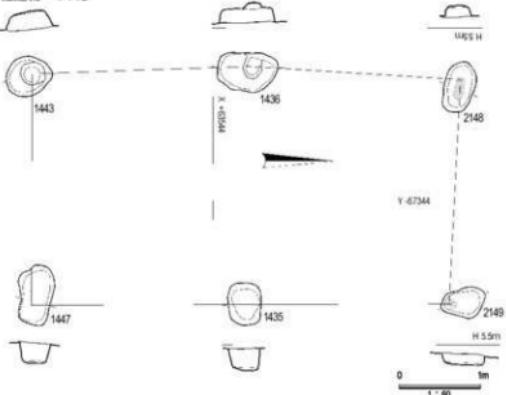
図中、平面図に柱痕跡を網点で示す。柱間隔については、柱痕跡または柱圧痕の中心間の距離を基

本とし、確認できなかつたときは、柱穴の中央からの距離とした。以下登録順に図示する。

#### 据立柱建物 1399



#### 据立柱建物 1449



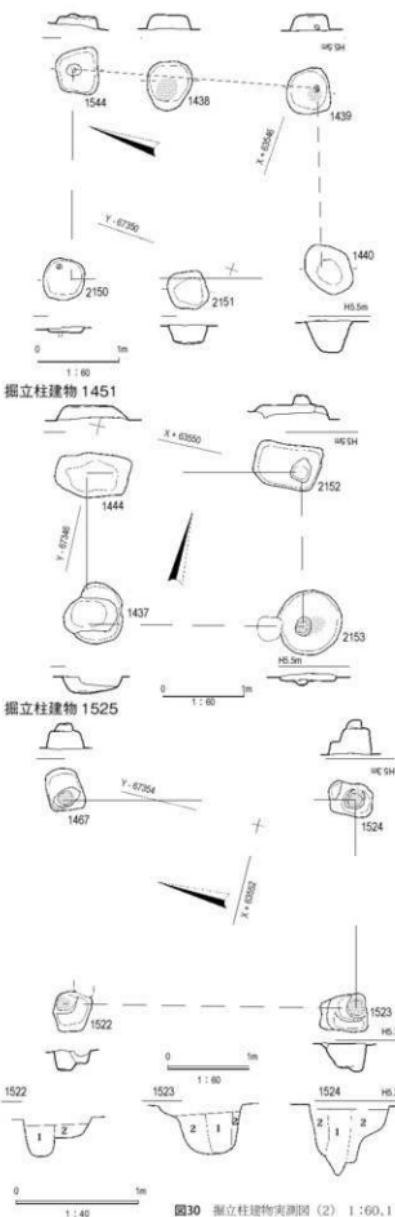
(図 29-54-55)

他の建物とは離れて谷1203西岸のG46-04区に位置する。1×1間の建物である。柱穴は隅円の長方形で長さ0.7m、幅0.5m。底部近く0.1m程の遺存である。2基については土層断面で柱痕跡を確認した。柱穴堀方は地山土で埋めている。梁行方向の寸法の差が大きく、平面台形状の配置となるが、他に候補となる柱穴は見当たらぬ。また、本調査区内、別調査においても、同様な例がある。建物の方向は、桁行N3.9°E。各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴(1403～1402)1.27m、柱穴(1400～1401)1.58m。桁行：柱穴(1403～1400)2.4m、柱穴(1402～1401)2.44m。想定する建物規

図29 据立柱建物実測図(1) 1:60, 1:40

## 掘立柱建物 1450



横は桁行 2.7 m、梁行 1.5 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 1449 (図 29・54・56)

G46-55 区に位置する。1 × 2 間の建物である。柱穴の通りは良いが、小形で不整である。柱痕跡、柱圧痕を確認した。長さ 0.3 ~ 0.4 m、幅幅 0.2 m。

建物の方向は、桁行 N90.0° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2149 ~ 2148) 2.67 m、柱穴 (1435 ~ 1436) 2.88 m、柱穴 (1447 ~ 1443) 2.81 m。

桁行: 柱穴 (2149 ~ 1435) 2.55 m、柱穴 (1435 ~ 1447) 2.60 m、柱穴 (2148 ~ 1436) 2.56 m、柱穴 (1436 ~ 1443) 2.74 m。

想定する建物規模は桁行 2.7 m、梁行 1.5 m。柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 1450 (図 30・57)

G46-55 区に位置する。1 × 2 間の建物である。柱穴は不整な円形状、隅柱とする 1 基が極端にほか、底面の高さが不整である。建物の方向は、桁行 N18.9° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1440 ~ 1439) 2.24 m、柱穴 (2151 ~ 1438) 2.58 m、柱穴 (2150 ~ 1544) 2.62 m

桁行: 柱穴 (1440 ~ 2151) 1.70 m、柱穴 (2151 ~ 2150) 1.59 m、柱穴 (1439 ~ 1438) 1.84 m、柱穴 (1438 ~ 1544) 1.2 m。

梁行寸法が明瞭に異なり、片方の妻側に開く平面形となる。間柱も片側に寄るが、周囲に同種柱穴はない。離れた 1 列を除外して、1 × 1 件の構成の可能性を残す。

想定する建物規模は桁行 3.2 m、梁行 2.5 m。

柱穴埋土から小量の土器、石器が出土した。

## 柱穴 1522 土層

1 柱頭跡堅灰色土 (10YR3/1), 地山土塊 (厚 2cm) を含む。  
2 柱穴跡堅灰色土 (10YR4/1), 地山土塊 (厚 2cm) を多量に含む。

## 柱穴 1523 土層

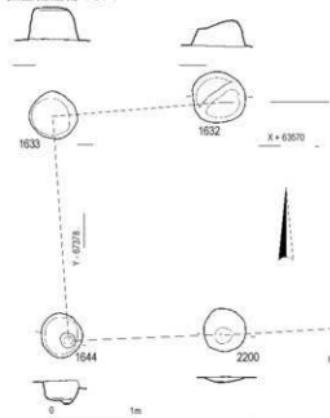
1 柱頭跡堅灰色土 (10YR3/1), 地山土塊 (厚 1cm) を少量含む。  
2 柱穴跡堅灰色土 (10YR4/1), 地山土塊 (厚 2cm) を少量含む。

## 柱穴 1524 土層

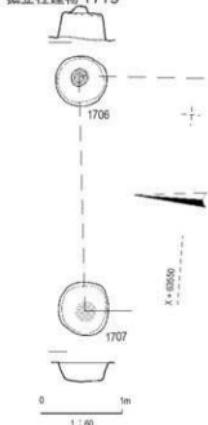
1 柱頭跡堅灰色土 (10YR4/1), 地山土塊 (厚 10cm) を含む。  
2 柱穴跡堅灰色土 (10YR4/1), 地山土塊 (厚 10cm) を含む。

図30 掘立柱建物実測図 (2) 1:60, 1:40

## 掘立柱建物 1571



## 掘立柱建物 1719



1 黒褐色粘土・灰白色粘土が混じる。  
0 5m  
1 : 40

1707

1706

1705

1704

1703

1702

1701

1700

1699

1688

1687

1686

1685

1684

1683

1682

1681

1680

1679

1678

1677

1676

1675

1674

1673

1672

1671

1670

1669

1668

1667

1666

1665

1664

1663

1662

1661

1660

1659

1658

1657

1656

1655

1654

1653

1652

1651

1650

1649

1648

1647

1646

1645

1644

1643

1642

1641

1640

1639

1638

1637

1636

1635

1634

1633

1632

1631

1630

1629

1628

1627

1626

1625

1624

1623

1622

1621

1620

1619

1618

1617

1616

1615

1614

1613

1612

1611

1610

1609

1608

1607

1606

1605

1604

1603

1602

1601

1600

1599

1598

1597

1596

1595

1594

1593

1592

1591

1590

1589

1588

1587

1586

1585

1584

1583

1582

1581

1580

1579

1578

1577

1576

1575

1574

1573

1572

1571

1570

1569

1568

1567

1566

1565

1564

1563

1562

1561

1560

1559

1558

1557

1556

1555

1554

1553

1552

1551

1550

1549

1548

1547

1546

1545

1544

1543

1542

1541

1540

1539

1538

1537

1536

1535

1534

1533

1532

1531

1530

1529

1528

1527

1526

1525

1524

1523

1522

1521

1520

1519

1518

1517

1516

1515

1514

1513

1512

1511

1510

1509

1508

1507

1506

1505

1504

1503

1502

1501

1500

1499

1498

1497

1496

1495

1494

1493

1492

1491

1490

1489

1488

1487

1486

1485

1484

1483

1482

1481

1480

1479

1478

1477

1476

1475

1474

1473

1472

1471

1470

1469

1468

1467

1466

1465

1464

1463

1462

1461

1460

1459

1458

1457

1456

1455

1454

1453

1452

1451

1450

1449

1448

1447

1446

1445

1444

1443

1442

1441

1440

1439

1438

1437

1436

1435

1434

1433

1432

1431

1430

1429

1428

1427

1426

1425

1424

1423

1422

1421

1420

1419

1418

1417

1416

1415

1414

1413

1412

1411

1410

1409

1408

1407

1406

1405

1404

1403

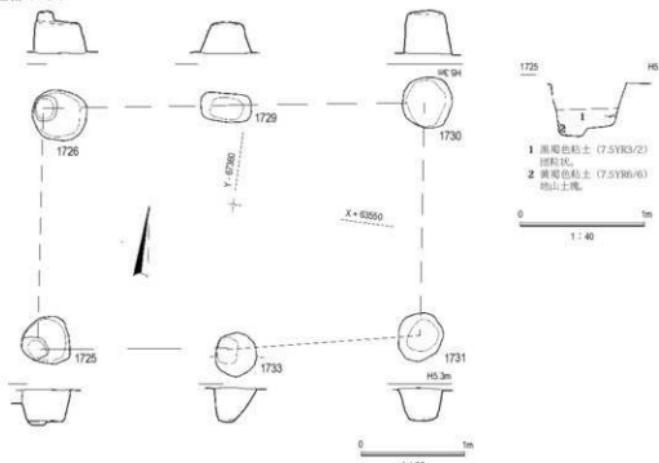
1402

1401

1400

1399

掘立柱建物 1734



掘立柱建物 1831

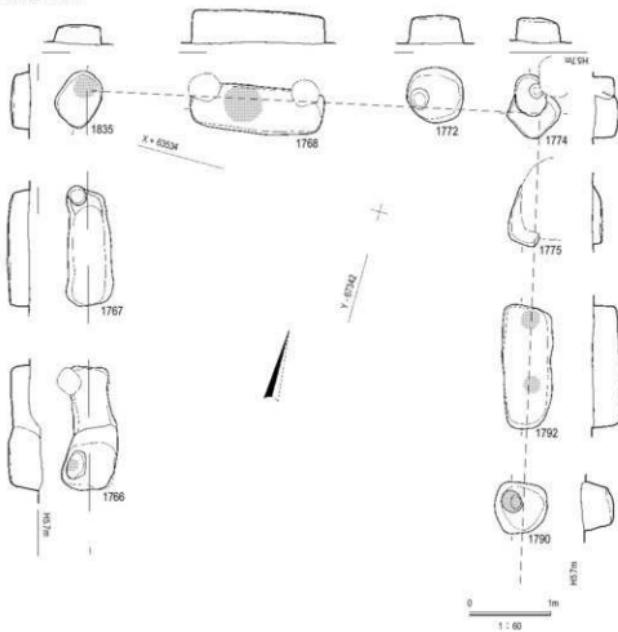


图32 掘立柱建物実測図(4) 1:60, 1:40

### 掘立柱建物 1571 (図 31・60・61)

G46-87・88 区に位置する。1 × 2 間の建物である。柱穴は円形で、間柱の 1 基が極浅い。柱痕跡は確認できなかったが、柱圧痕の残る柱穴がある。

建物の方向は、桁行 N89.4° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1642 ~ 1630) 2.76 m、柱穴 (2200 ~ 1632) 2.86 m、柱穴 (1644 ~ 1633) 2.76 m。

桁行: 柱穴 (1642 ~ 2200) 2.06 m、柱穴 (2200 ~ 1644) 1.93 m、柱穴 (1630 ~ 1632) 2.12 m、柱穴 (1632 ~ 1633) 2.12 m

想定する建物規模は桁行 4.3 m、梁行 2.8 m。

柱穴から小量の土器が出土した。

### 掘立柱建物 1719 (図 31・62)

G46-86 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形。柱痕跡、柱圧痕の残る柱穴がある。

建物の方向は、桁行 N4.2° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1713 ~ 1712) 2.90 m、柱穴 (1707 ~ 1706) 2.89 m。

桁行: 柱穴 (1713 ~ 1707) 3.35 m、柱穴 (1712 ~ 1706) 3.40 m。



柱穴1719上層

- 1 明褐色粘質土。地山土。(8) 魔を含む。
- 2 黄褐色粘質土。地山土。(8) 団粒を1/3含む。
- 3 黄褐色粘質土。地山土。(8) 魔を1/3含む。
- 4 淡褐色粘質土。
- 5 淡褐色粘質土。砂礫混じり。
- 6 淡黃色粘質土。砂礫混じり。
- 7 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 8 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 9 黄色粘質土。砂礫混じり。



柱穴1792上層

- 1 淡褐色粘質土。地山土。(7・8) 小魔を1/3含む。
- 2 黄褐色粘質土。大半地山土。(8) 魔。
- 3 黄褐色粘質土。大半地山土。(7) 魔。
- 4 黄褐色粘質土。大半地山土。(9) 魔。
- 5 黄褐色粘質土。
- 6 淡黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 7 淡褐色粘質土。砂礫混じり。
- 8 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 9 黄色粘質土。砂礫混じり。



柱穴1774上層

- 1 明褐色粘質土。地山土。(6) 魔を3/4含む。
- 2 明褐色粘質土。地山土。(5) 团粒を1/2含む。
- 3 明褐色粘質土。地山土。(6) 大魔を3/4含む。
- 4 明褐色粘質土。地山土。(5・6) 大魔を3/4含む。
- 5 淡褐色粘質土。
- 6 淡黃色粘質土。砂礫混じり。
- 7 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 8 黄褐色粘質土。砂礫混じり。



柱穴1772上層

- 1 明褐色粘質土。地山土。(4) 魔を1/2含む。
- 2 明褐色粘質土。地山土。(4・5) 魔を3/4含む。
- 3 淡褐色粘質土。砂礫混じり。
- 4 淡褐色粘質土。砂礫混じり。
- 5 黄褐色粘質土。砂礫混じり。



柱穴1768上層

- 1 明褐色粘質土。地山土。(4・5) 团粒を1/2含む。
- 2 明褐色粘質土。地山土。(5) 大魔を3/4含む。
- 3 明褐色粘質土。地山土。(5・6) 大魔を3/4以上含む。
- 4 淡褐色粘質土。砂礫混じり。
- 5 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 6 黄褐色粘質土。砂礫混じり。



柱穴1835上層

- 1 明褐色粘質土。
- 2 明褐色粘質土。地山土团粒を1/4含む。
- 3 明褐色粘質土。地山土大魔を3/4含む。
- 4 明褐色粘質土。地山土团粒を1/4以上含む。
- 5 淡黃色粘質土。砂礫混じり。
- 6 淡褐色粘質土。砂礫混じり。



柱穴1767上層

- 1 明褐色粘質土。地山土。(4) 大魔を1/2含む。
- 2 明褐色粘質土。地山土。(4) 大魔を3/4含む。
- 3 明褐色粘質土。地山土。(5) 大魔を3/4含む。
- 4 淡黃色粘質土。砂礫混じり。
- 5 淡褐色粘質土。砂礫混じり。
- 6 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 7 黄褐色粘質土。砂礫混じり。



柱穴1766上層

- 1-3 明褐色粘質土。地山土。(9) 大魔を1/2含む。
- 2 明褐色粘質土。地山土。(4) 大魔を3/4以上含む。
- 3 明褐色粘質土。
- 4-7 淡褐色粘質土。大半地山土。(10) 魔。
- 5 黄褐色粘質土。大半地山土。(10) 魔。
- 6 黄褐色粘質土。大半地山土。(9) 魔。
- 7 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 8 淡褐色粘質土。砂礫混じり。
- 9 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 10 黄褐色粘質土。砂礫混じり。

図33 掘立柱建物実測図 (5) 1:40

## 掘立柱建物 1832

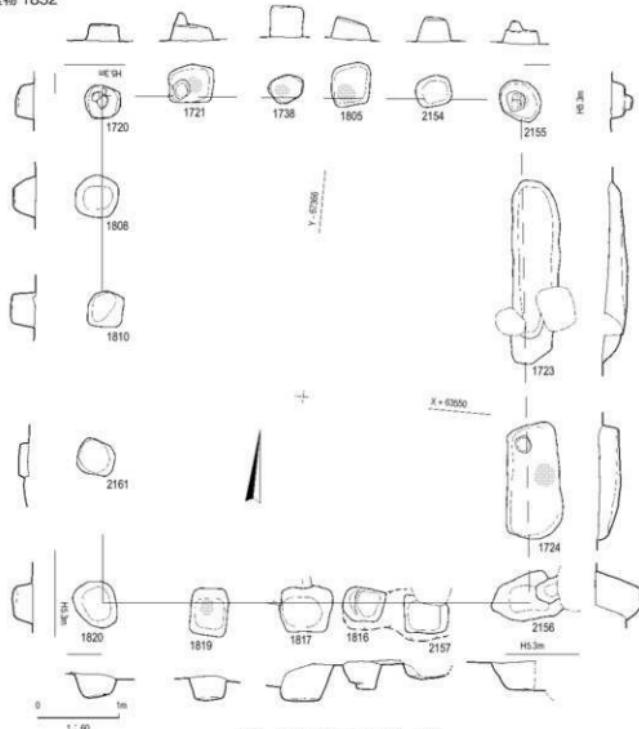


図34 掘立柱建物実測図(6) 1:60

想定する建物規模は桁行 3.5 m、梁行 2.9 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 1734 (図 32・63)

G46-66-76 区に位置する。1 × 2 間の建物である。柱穴は円形のものに、長方形の間柱柱穴が加わる。柱圧痕の残る柱穴がある。建物の方向は、桁行 N82.4° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行:柱穴 (1731 ~ 1730) 2.90 m、柱穴 (1733 ~ 1729) 2.90 m、柱穴 (1725 ~ 1726) 2.92 m。

桁行:柱穴 (1731 ~ 1733) 2.41 m、柱穴 (1733 ~ 1725) 2.28 m、柱穴 (1730 ~ 1729) 2.36 m、柱穴 (1729 ~ 1726) 2.27 m。

想定する建物規模は桁行 4.7 m、梁行 2.9 m。柱穴から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 1831 (図 32・33・64・65)

G46-54・44 区に位置する。柱穴には布掘りによる柱穴を含む。南側の妻は調査区外となる南北方向

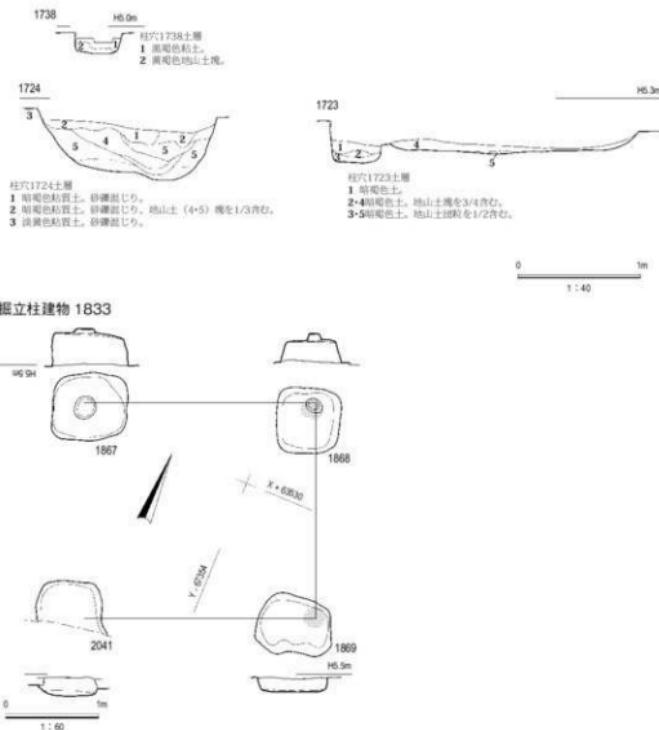


図35 掘立柱建物実測図(7) 1:60, 1:40

の建物と復原した。その他の柱穴は不整な円形状、隅円方形。他に柱穴が分布するなかで、建物としての構成は明瞭に見て取ることができる。布掘りは長さ 1.5 m、幅 0.6 m 前後。掘り下げ中、平面で柱痕跡を確認し、下部に空洞として残るものがあったが、断面では確認できなかった。梁行 3 間、桁行 5 間以上の規模かと考えられる。建物の方向は、桁行 N15.3° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

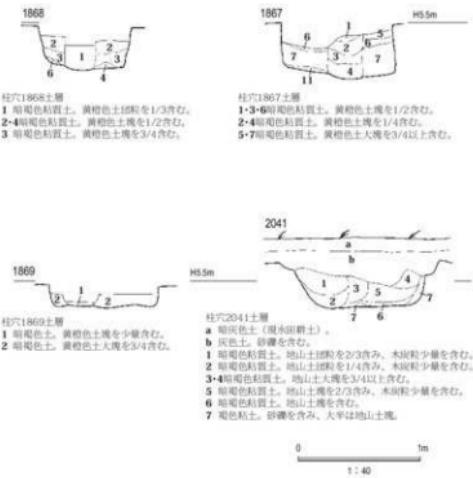
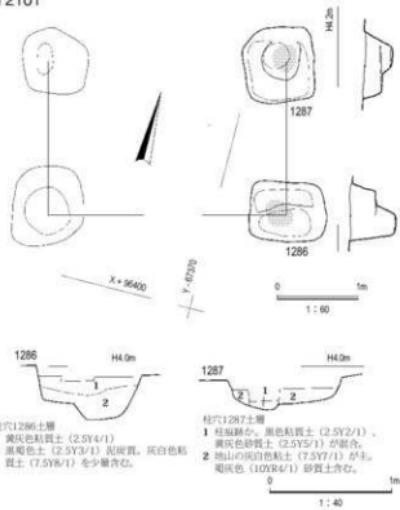
梁行: 柱穴 (1774 ~ 1772) 1.45 m、柱穴 (1772 ~ 1768) 2.15 m、柱穴 (1709 ~ 1835) 1.98 m。

桁行: 柱穴 (1774 ~ 1775) 1.56 m、柱穴 (1775 ~ 1792) 1.25 m、柱穴 (1792 ~ 1792) 0.80 m、柱穴 (1792 ~ 1790) 1.40 m。柱間が狭い。

想定する建物規模は桁行 5.3 m、梁行 5.5 m。柱穴から小量の土器、石器が出土した。

掘立柱建物 1832 (図 34・35) • 66

G46-75-76 区に位置する。東平側、南妻側のそれぞれ一部の柱穴を布掘りの堀方とする 5 × 4 間の建物とする。この区域では、同規模の柱穴が散布し、複数建物が重複する。北西隅柱とするものが小形で、やや位置をはずしている点疑問も残る。

**掘立柱建物 2101****図36 掘立柱建物実測図(8) 1:60, 1:40**

建物の方向は、桁行 N54.8° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2156 ~ 2157) 1.24 m。  
柱穴 (2157 ~ 1816) 0.71 m。  
柱穴 (1816 ~ 1817) 0.81 m。柱穴 (1817 ~ 1819) 1.21 m。柱穴 (1819 ~ 1820) 1.38 m。

梁行: 柱穴 (2155 ~ 2203) 1.1 m。  
柱穴 (2203 ~ 1805) 1.09 m。  
柱穴 (1805 ~ 1738) 0.77 m。柱穴 (1738 ~ 1721) 1.11 m。柱穴 (1721 ~ 1720) 1.15 m。

桁行: 柱穴 (1820 ~ 2204) 1.84 m。  
柱穴 (2204 ~ 1810) 1.85 m。  
柱穴 (1810 ~ 1808) 1.34 m。柱穴 (1808 ~ 1720) 1.17 m。東側は、柱位置を特定できないため計画しない。

想定する建物規模は桁行 6.3 m、  
梁行 5.3 m。柱穴埋土から小量の土器、石器が出土した。

**掘立柱建物 1833 (図 35・36・67 ~ 69)**

G46-63・64 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は隅円方形でよく整っているように見える。一辺 1.0 m 程で、深さ 0.3 m が遺存する。柱痕跡が明瞭で、柱穴底面には柱圧痕も残る。

建物の方向は、桁行 N68.0° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

東西側: 柱穴 (1869 ~ 1868)  
2.58 m、柱穴 (2041 ~ 1837) 2.57 m。

南北側: 柱穴 (1869 ~ 2041)  
3.03 m、柱穴 (1868 ~ 1837) 2.79 m。

想定する建物規模は桁行 2.9 m、  
梁行 2.7 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土

## 掘立柱建物 2102

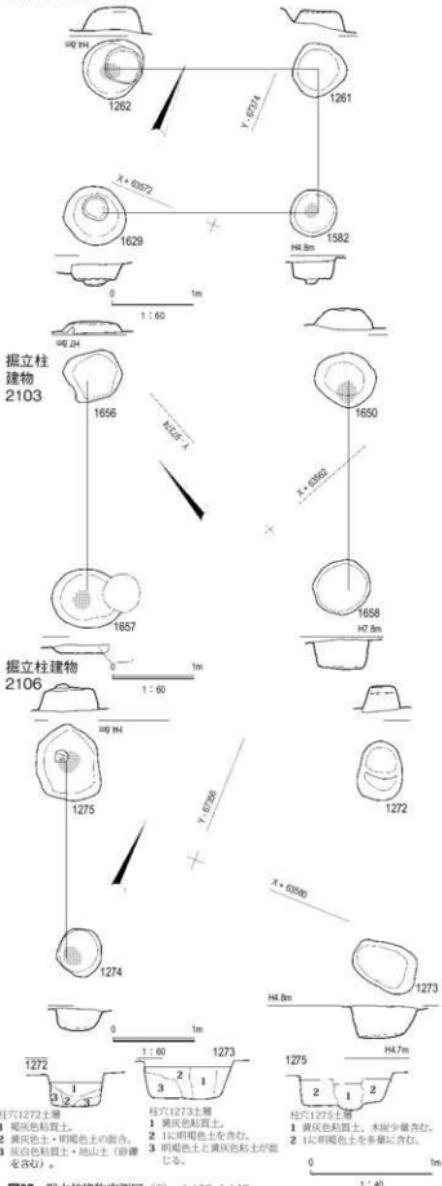


図37 掘立柱建物実測図 (9) 1:60, 1:40

した。

## 掘立柱建物 2101 (図 36・70)

G47-71 区に位置する。1 × 1 間を復原できる建物である。東西棟の西側柱穴は、既掘の第 4 次調査区内にあって報告された SK001・SK002 が該当する。柱穴は隅円の方形・長方形で大形。長さ 0.9 ~ 1.0 m、幅 0.8 ~ 0.9 m、深さは 0.4 m。

遺構図を図上で接合して示す建物の方向は、桁行 N75.3° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴 (1286 ~ 1287) 1.93 m、柱穴 (SK001 ~ SK002) 1.85 m。桁行は接合精度があり示さない。

想定する建物規模はあえて桁行をいうと 2.9 m、梁行 2.0 m。

## 掘立柱建物 2102 (図 37)

G46-88 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形で、径 0.6 ~ 0.8 m、底面の高さはよく揃っている。柱痕跡、柱圧痕が残るものがある。

建物の方向は、桁行 N67.3° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴 (1582 ~ 1261) 1.78 m、柱穴 (1629 ~ 1262) 1.67 m。

桁行：柱穴 (1582 ~ 1629) 2.7 m、柱穴 (1261 ~ 1262) 2.56 m。

想定する建物規模は桁行 2.7 m、梁行 1.8 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2103 (図 37)

G46-87 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は楕円形で、長径 0.7 ~ 0.8 m、底面の高さに幅がある。掘り下げ時柱痕跡を認めたが、断面では観察できなかった。

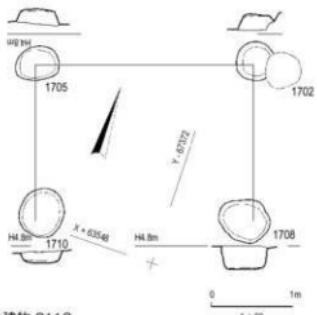
建物の方向は、桁行 N48.3° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴 (1658 ~ 1650) 2.48 m、柱穴 (1657 ~ 1656) 2.67 m。

桁行：柱穴 (1658 ~ 1657) 3.25 m、柱

## 掘立柱建物 2112



## 掘立柱建物 2113

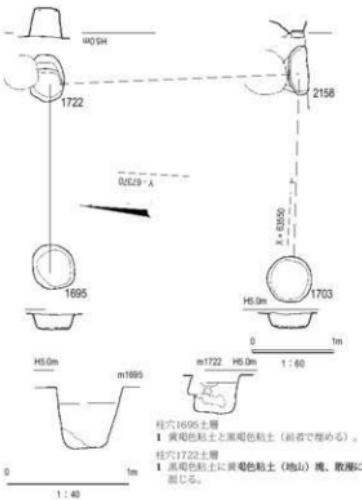


図38 掘立柱建物実測図(10) 1:60, 1:40

m、柱痕跡は確認できなかった。底面高さに幅が大きい。

建物の方向は、桁行 N3.1° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴（1703～2162）2.51 m、柱穴（1895～1722）2.4 m。

桁行：柱穴（1703～1895）2.94 m、柱穴（2162～1722）3.06 m。

想定する建物規模は桁行 3.1 m、梁行 2.4 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 穴 (1650～1656) 3.18 m。

想定する建物規模は桁行 3.2 m、梁行 2.8 m。  
柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2106 (図 37)

G46-68・69 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は不整な橢円形状で、形状、規模、底面の高さに幅がある。長径 0.6 ~ 0.9 m。

建物の方向は、桁行 N67.9° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴（1273～1272）2.45 m、柱穴（1274～1275）2.4 m。

桁行：柱穴（1273～1274）3.91 m、柱穴（1272～1275）3.84 m。

想定する建物規模は桁行 3.9 m、梁行 2.4 m。  
柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2112 (図 38)

G46-85・86 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は不整な橢円形ないし円形状で、長径 0.5 ~ 0.7 m。底面の高さにやや幅がある。柱痕跡は確認できなかった。

建物の方向は、桁行 N71.4° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴（1708～1702）1.97 m、柱穴（1710～1705）1.87 m。

桁行：柱穴（1708～1710）2.56 m、柱穴（1702～1705）2.7 m。

想定する建物規模は桁行 2.7 m、梁行 1.9 m。  
柱穴埋土中から小量の土器が出土した。

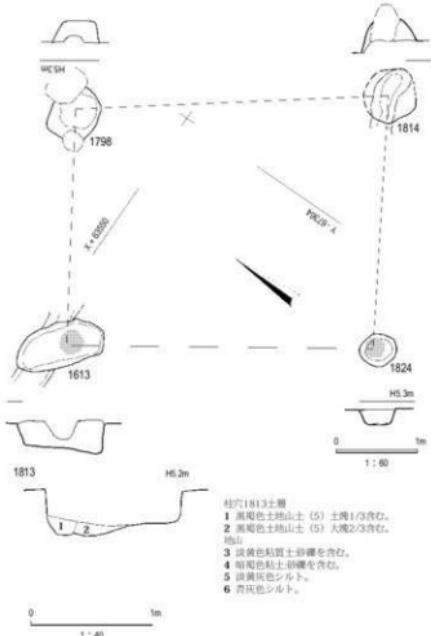
## 掘立柱建物 2113 (図 38)

G46-76・86 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形・橢円形状で、径・長径が 0.6

柱穴 1695 上層  
■ 黄褐色粘土と黒褐色粘土（前者で埋める）。

柱穴 1722 上層  
■ 黑褐色粘土に黄褐色粘土（地山）塊、散漫に混じる。

## 掘立柱建物 2114



## 掘立柱建物 2115

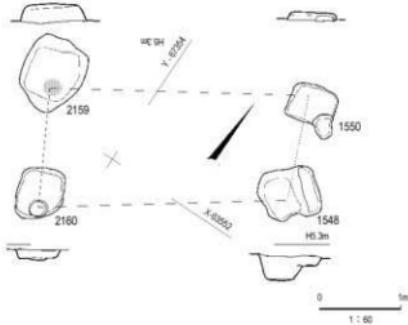


図39 掘立柱建物実測図(11) 1:60, 1:40

## 掘立柱建物 2114 (図 39)

G46-74・75 区に位置する。1×1間の建物である。柱穴の形状は不整な円形状・橢円形状で、形状、規模の変化の幅が大きい。底面の高さも不揃いである。配置は平行四辺形となる。

建物の方向は、桁行 N34.1° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1824～1814) 3.01 m、柱穴 (1613～1798) 2.96 m。

桁行: 柱穴 (1824～1613) 3.77 m、柱穴 (1814～1798) 3.81 m。

想定する建物規模は桁行 3.8 m、梁行 3.0 m。

柱穴埋土から小量の土器及び砥石が出土した。

## 掘立柱建物 2115 (図 39)

G46-66 区に位置する。1×1間の建物である。柱穴は隅円方形である。規模の差が顕著で、長さ 0.6～0.9 m の幅があるが、周囲に同規模の柱穴は他に分布しない。底面の高さは段掘り状となって一段低いものがある。梁行が狭く、かつ寸法の差が顕著である。掘り下げ中に柱痕跡を認めたが断面では確認できなかった。柱圧痕が残る柱穴がある。

建物の方向は、桁行 N56.4° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1548～1550) 1.36 m、柱穴 (2160～2159) 1.46 m。

桁行: 柱穴 (1548～2160) 3.1 m、柱穴 (1550～2159) 3.15 m。

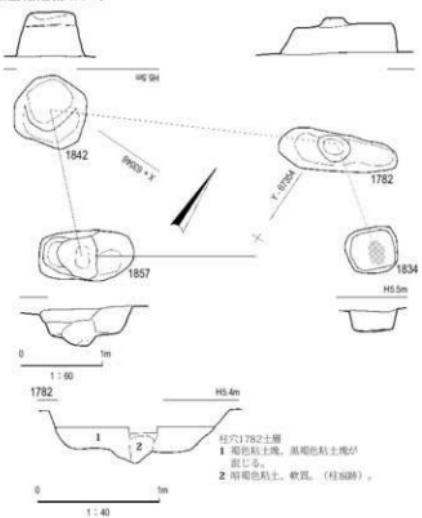
想定する建物規模は桁行 3.3 m、梁行 1.4 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2116 (図 40)

G46-65 区に位置する。1×1間の建物である。建物 2115 と同じように梁行がごく狭く、寸法が不一致である。柱穴は不整な方形形状のものと長楕円形状のものとが

## 掘立柱建物 2116



## 掘立柱建物 2117

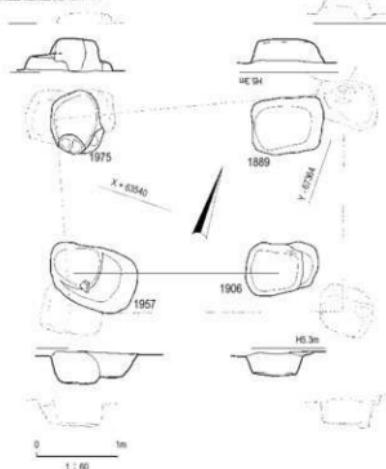


図40 掘立柱建物実測図(12) 1:60, 1:40

柱穴は円形状で、径 0.5 m 前後。底面の高さに高低 2 者ある。底面には柱圧痕が残る。

建物の方向は、桁行 N54.8° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

対角線上に位置している。前者は長さ 0.6 ~ 0.9 m、後者は 1.2 ~ 1.5 m の規模である。底面の高さはよく揃っている。底面には柱圧痕が残るもの、段掘り状となるものがある。

建物の方向は、桁行 N56.0° E。各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1834 ~ 1732) 1.47 m、柱穴 (1857 ~ 1842) 1.75 m。

桁行: 柱穴 (1834 ~ 1857) 3.6 m、柱穴 (1732 ~ 1842) 3.4 m。

想定する建物規模は桁行 3.8 m、梁行 1.6 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2117 (図 40)

G46-74・75 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は隅円長方形形状で、段掘りとなるものがある。柱穴の軸は建物のそれに沿うものと直交するものとがある。長さ 0.9 ~ 1.2 m の幅がある。底面の高さは揃っている。底面に段掘り、柱部の一段の掘削が行われているように見える。

建物 3133 の柱穴が建物 2117 のそれと重複して新しい。

建物の方向は、桁行 N70.3° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1906 ~ 1889) 1.8 m、柱穴 (1957 ~ 1975) 1.85 m。

桁行: 柱穴 (1906 ~ 1957) 2.32 m、柱穴 (1899 ~ 1975) 2.59 m

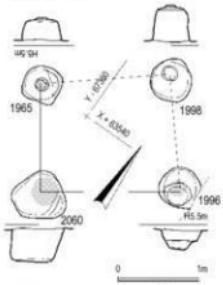
想定する建物規模は桁行 2.6 m、梁行 2.0 m。

建物 2117 を構成する柱穴埋土から、他の建物例より多くの土器が出土した。

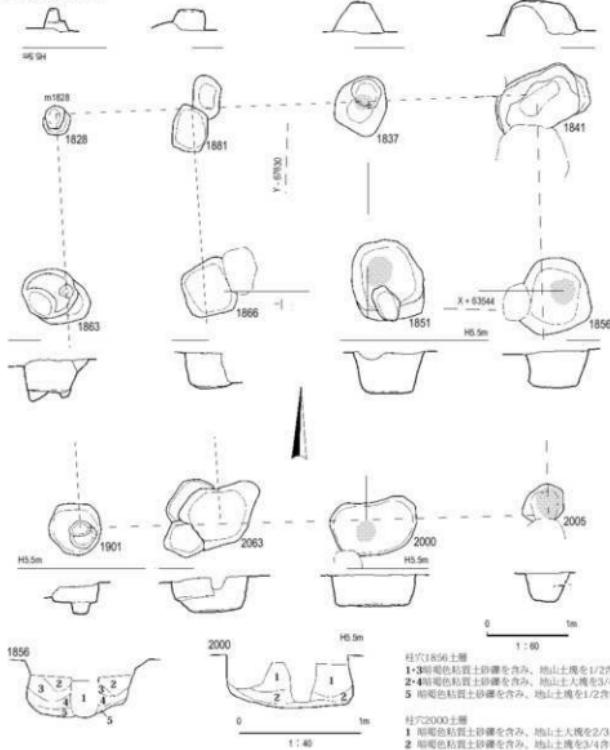
## 掘立柱建物 2118 (図 41)

G46-74 区に位置する。1 × 1 間の建物である。

## 掘立柱建物 2118



## 掘立柱建物 2119



梁行: 柱穴 (1996 ~ 1997) 1.4 m、柱穴 (2060 ~ 1965)

1.33 m。

桁行: 柱穴 (1996 ~ 2060) 1.63 m、柱穴 (1997 ~ 1965) 1.6 m。

想定する建物規模は桁行 1.7 m、梁行 1.3 m。極小形の建物となる。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

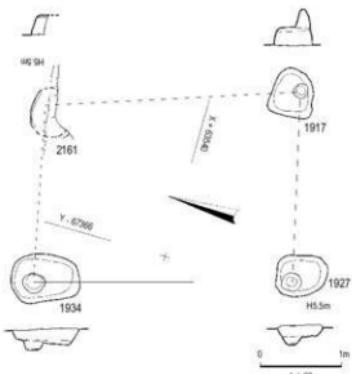
## 掘立柱建物 2119 (図 41)

G46-65 区、柱穴の最も密に分布する区域に位置する。2 × 4 間の縦柱と復原する建物である。柱穴の形状は不整な円形状から開円長方形まで各種で、規模の幅も径 0.4 m から長さ 1.1 m ま

- 柱穴①: H.5m 土壠  
 1. 斜面色粘質土砂礫を含み、地山土塊を1/2含む。  
 2. 斜面色粘質土砂礫を含み、地山土塊を3/4含む。  
 3. 斜面色粘質土砂礫を含み、地山土塊を1/2含む。
- 柱穴②: H.5m 土壠  
 1. 斜面色粘質土砂礫を含み、地山土塊を2/3含む。  
 2. 斜面色粘質土砂礫を含み、地山土塊を3/4含む。  
 3. 斜面色粘質土砂礫を含み、地山土塊を1/3含む。

図41 掘立柱建物実測図 (13) 1:60, 1:40

## 掘立柱建物 2120



## 掘立柱建物 2121

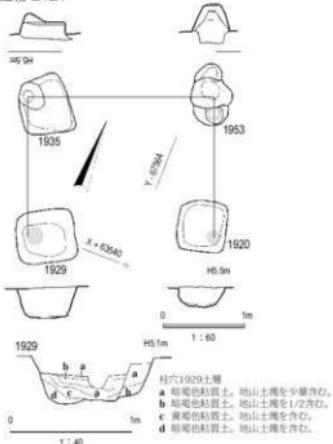


図42 掘立柱建物実測図(14) 1:60, 1:40

を掘り窪めた様な痕跡が残る。建物の方向は、桁行 N15.7° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴（1927～1917）2.35 m、柱穴（1934～2131）2.11 m

桁行：柱穴（1927～1934）3.17 m、柱穴（1917～2161）3.12 m。

想定する建物規模は桁行 3.0 m、梁行 2.4 m。

柱穴埋土から土器が出土した。まとまって土器が出土する柱穴がある。

でと大きい。特に隅柱とするものが小形である点は疑問が残る。柱筋は、縦横各列は通っていると言えるが、その方向が一定しない。また、柱穴軸方向も一定の法則性はない。一方、柱穴底面はよく揃っているように見える。

あるいはこのうちの一一部のみで、 $1 \times 2$  間、 $1 \times 1$  間の建物を構成するものかもしれない。

建物の方向は、桁行 N88.2° E。

各隅柱間の距離は、梁行：柱穴（2005～1841）5.06 m、柱穴（1901～1828）5.1 m。桁行：柱穴（200～1901）5.78 m、柱穴（1841～1826）5.94 mを測る。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴（2005～1856）2.65 m、柱穴（1856～1841）2.44 m、柱穴（2000～1857）3.13 m、柱穴（1857～1837）2.45 m、柱穴（2063～1866）2.84 m、柱穴（1866～1882）2.22 m、柱穴（1901～1863）2.96 m、柱穴（1863～1828）2.68 m。

桁行：柱穴（2005～2000）2.25 m、柱穴（2000～2063）1 m、柱穴（2063～1901）1 m、柱穴（1856～1851）2.32 m、柱穴（1851～1866）2.12 m、柱穴（1866～1863）1.87 m、柱穴（1841～1837）2.13 m、柱穴（1837～1882）1.91 m、柱穴（1882～1828）1.88 m。

想定する建物規模は桁行 6.0 m、梁行 5.2 m。

柱穴埋土から小量の土器のほか、砥石、紡錘車の出土があった。

## 掘立柱建物 2120 (図 42)

G46-74 区に位置する。 $1 \times 1$  間の建物である。

柱穴は梢円形状で、長径 0.6 m、0.9 m で建物長軸に沿うものと、直交するものとがある。底面の高さは揃っており、柱圧痕若しくは柱位置

## 掘立柱建物 2122

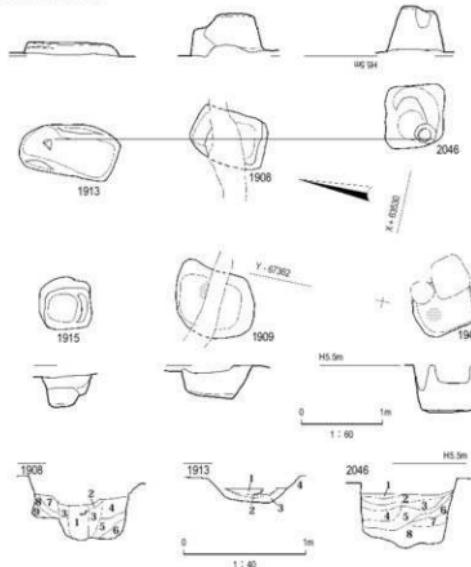


図43 掘立柱建物実測図(15) 1:60, 1:40

## 柱穴1908土層

- 1 明褐色粘質土。地山土塊 (黄褐色粘質土、砂) 1/4を含む。
- 2 黄褐色砂質土を含む。
- 3 黄褐色粘質土。地山土塊 (小径) を1/2を含む。
- 4 黄褐色粘質土。地山土塊 (中径) を3/4を含む。
- 5-7-9 黄褐色粘質土。地山土塊を3/4を含む。
- 6 明褐色粘質土。地山土塊を1/4を含む。
- 8 明褐色粘質土。地山土塊 (小径) を1/4を含む。

## 柱穴1913土層

- 1 黄褐色土。
- 2 砂混じり層。
- 3 黄褐色砂質土。地山土塊を含む。
- 4 黄褐色土。
- 5 黄褐色粘質土。砂礫混じり。
- 6 黄褐色粘質土。地山土塊を1/2を含む。
- 7 黄褐色粘質土。地山土塊を1/2を含む。
- 8 黄褐色粘質土。地山土塊を含む。

## 柱穴2046土層

- 1-3 明褐色粘質土。地山土塊を少しある。
- 2 黄褐色砂質土。
- 3 明褐色粘質土。地山土塊を3/4を含む。
- 4 黄褐色粘質土。地山土塊を1/2を含む。
- 5 黄褐色粘質土。地山土塊を1/2を含む。
- 6 黄褐色粘質土。地山土塊を1/2を含む。
- 7 黄褐色粘質土。地山土塊を1/2を含む。
- 8 黄褐色粘質土。地山土塊を含む。

後。断面で柱痕跡を確認できたもの、柱圧痕の残るものがある。柱穴底面は高低の差が大きい。

建物の方向は、桁行 N11.7° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1946 ~ 2046) 2.23 m、柱穴 (1909 ~ 1908) 1.91 m、柱穴 (1915 ~ 1913) 1.98 m。

桁行: 柱穴 (1946 ~ 1909) 2.83 m、柱穴 (1909 ~ 1915) 1.79 m、柱穴 (2046 ~ 1908) 2.36 m、柱穴 (1908 ~ 1913) 2.0 m。間柱が北側妻に寄った位置にある。

想定する建物規模は桁行 2.9 m、梁行 1.1 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。小形手捏ね土器が含まれる。

## 掘立柱建物 2123 (図 42)

G46-78・88区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形、隅円の方形で、径・長さ 0.4 ~ 0.6 m 程の幅がある。柱痕跡を認めたほかに、底部に柱圧痕若しくは部分的な掘削が深く残る。

建物の方向は、桁行 N59.3° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

## 掘立柱建物 2121 (図 42)

G46-74 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は 1 基を除き隅円長方形で、建物に軸方向を合わせている。長さ 0.7 m で、底面の高さは不揃いである。掘り下げ時に確認した柱痕跡は、断面では確認できなかった。柱圧痕の残るものがある。

建物の方向は、桁行 N69.8° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1920 ~ 1953) 1.81 m、柱穴 (1929 ~ 1935)

1.77 m。

桁行: 柱穴 (1920 ~ 1929) 2.19 m、柱穴 (1953 ~ 1935)

2.28 m。

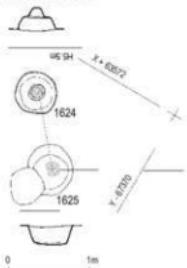
想定する建物規模は桁行 2.2 m、梁行 1.8 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

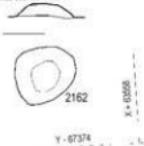
## 掘立柱建物 2122 (図 42)

G46-74 区に位置する。1 × 2 間の建物である。柱穴は方形、長方形で、建物軸に沿う方向のものがある。長さ 0.7 m、1.1 m 前

## 掘立柱建物 2123



## 掘立柱建物 2124



## 掘立柱建物 2125

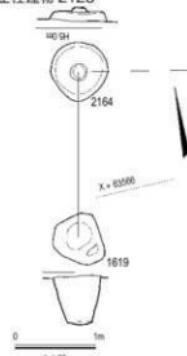


図44 掘立柱建物実測図(16) 1:60

梁行:柱穴 (1574 ~ 1875) 1.01 m、柱穴 (1625 ~ 1624) 0.96 m。

桁行:柱穴 (1574 ~ 1625) 3.82 m、柱穴 (1575 ~ 1624) 3.98 m。

桁行に対して梁行の寸法が小さく、板幅の狭い平面形となる。想定する建物規模は桁行 2.9 m、梁行 1.1 m。

柱穴埋土から極小量の遺物が出土した。

## 掘立柱建物 2124 (図 42)

G46-86 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形状、椭円形状となるが、径 0.5 m の 1 基をのぞくと径・長さが 0.5 m 前後に纏まる。遺存するのは底部に近い部分のみであるが、底面の高さは、おおむね揃っている。柱痕跡、柱圧痕は確認できなかった。

建物の方向は、桁行 N3.7° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行:柱穴 (1675 ~ 1672) 1.93 m、柱穴 (2163 ~ 2162) 1.84 m。

桁行:柱穴 (1675 ~ 2163) 3 m、柱穴 (1672 ~ 2162) 2.92 m。

想定する建物規模は桁行 3.0 m、梁行 2.0 m。平面形状は整った長方形を復原できる。

柱穴埋土中から小量の土器が出土したほかに、石錘の出土があった。

## 掘立柱建物 2125 (図 42)

G46-77 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は不整な円形状で、径 0.5 ~ 0.7 m である。底面の高さは、高低差が大きい。柱穴底面には柱圧痕が残るものがある。

建物の方向は、桁行 N3.7° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

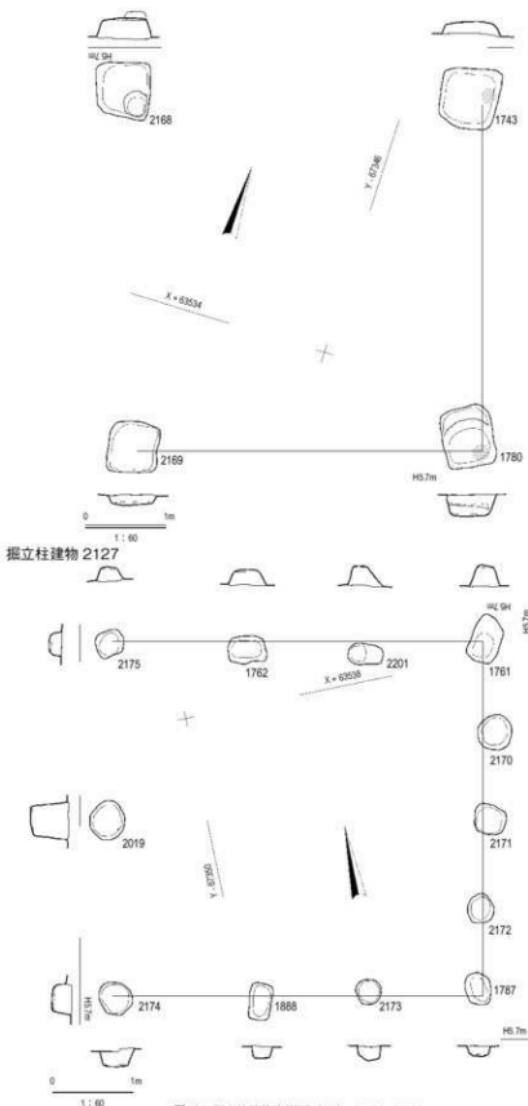
梁行:柱穴 (2166 ~ 2165) 2.12 m、柱穴 (1619 ~ 2164) 2.05 m。

桁行:柱穴 (2166 ~ 1619) 2.78 m、柱穴 (2165 ~ 2164) 3.16 m。

柱穴の配列はゆがんだ四辺形となる。想定する建物規模は桁行 3.1 m、梁行 2.1 m。

柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

## 掘立柱建物 2126



## 掘立柱建物 2126 (図 45)

G46-54 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は方形・長方形形状で、長さ 0.7 ~ 0.8 m。底面の高さは高低があり、対角線上の柱穴で一致する。底面に柱圧痕が残るものがある。柱間隔が大きいが間柱は確認できなかった。この区域で他に同形状・規模の柱穴は見当たらず、この構成以外は考えられない。建物の方向は、桁行 N72.5° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

東西側：柱穴（1780 ~ 1743）4.38 m、柱穴（2169 ~ 2168）4.22 m。

南北側：柱穴（1780 ~ 2169）4.3 m、柱穴（1743 ~ 2168）4.31 m。

想定する建物規模は桁行 4.5 m、梁行 4.5 m。

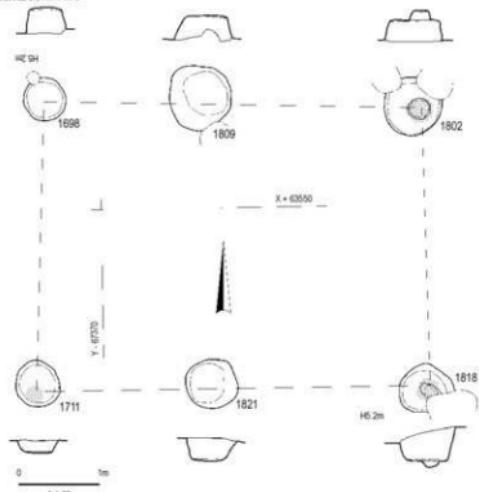
柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2127 (図 45)

G46-54・64 区に位置する。2 × 3 間と復原する建物である。柱穴は円形・不整な橢円形状である。前者で径 0.3 ~ 0.5 m、後者で長さ 0.5 ~ 0.6 m。建物は方形となり、南北側が 3 間、東西側は、西側は中央に間柱 1 基となるのに対し、東側では、さらにその間に間柱が配置され、4 間の構成となる。柱穴底面の高さをみ

図45 掘立柱建物実測図 (17) 1:60, 1:40

掘立柱建物 2128



掘立柱建物 2129

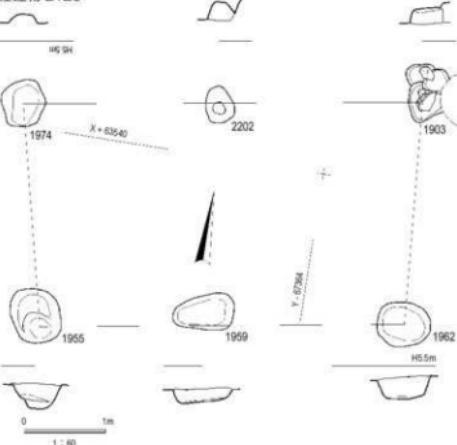


図46 掘立柱建物実測図(18) 1:60

がある。

建物の方向は、桁行 N88.8° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行：柱穴（1818～1802）3.47 m、柱穴（1821～1809）3.6 m、柱穴（1711～1898）3.6 m。

ると東側、南側と隅柱が一段低く間柱が一段高い位置で揃っているように見える。柱痕跡、柱圧痕とともに確認することはできなかった。建物の方向は、桁行 N78.4° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

東西側：柱穴（1787～2172）0.97 m、柱穴（2172～2171）1.09 m、柱穴（2171～2170）1.11 m、柱穴（2170～1761）1.05 m、柱穴（2174～2019）2.23 m、柱穴（2019～2175）2.16 m。

南北側：柱穴（1787～2173）1.37 m、柱穴（2173～1888）1.31 m、柱穴（1888～2174）1.78 m、柱穴（1761～2201）1.49 m、柱穴（2201～1762）1.36 m、柱穴（1762～2175）0.69 m

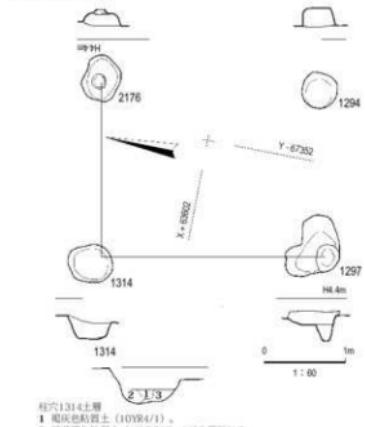
想定する建物規模は桁行4.7 m、梁行4.4 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

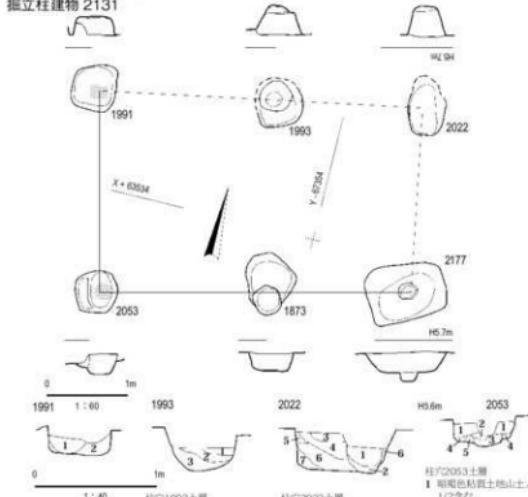
掘立柱建物 2128 (図46)

G46-75・76・85・86 区に位置する。1×2間の建物である。柱穴は円形で、規模に幅がある。径0.5～0.8 m。底面の高低差は小さい。柱痕跡、柱圧痕を確認できる柱穴

## 掘立柱建物 2130



## 掘立柱建物 2131



桁行: 柱穴 (1818 ~ 1821) 2.7 m、柱穴 (1831 ~ 1871) 2.1 m、柱穴 (1802 ~ 1809) 2.62 m、柱穴 (1809 ~ 1698) 1.98 m。

間柱の位置が、両側とも西の妻側に偏った位置にある。

想定する建物規模は桁行 4.8 m、梁行 3.6 m。

## 掘立柱建物 2129 (図 46)

G46-74・75 区に位置する。1 × 2 間の建物である。柱穴は不整な円形状、橢円形状を呈し、径・長さは 0.6 ~ 0.7 m。

柱穴底面には一段掘り込みのあるものがあり、高さには高低がある。

建物の方向は、桁行 N81.2° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1962 ~ 1903) 2.78 m、柱穴 (1959 ~ 2202) 2.56 m、柱穴 (1955 ~ 1974) 2.75 m。

桁行: 柱穴 (1962 ~ 1959) 2.36 m、柱穴 (1959 ~ 1955) 2.15 m、柱穴 (1903 ~ 2202) 2.56 m、柱穴 (2202 ~ 1974) 2.38 m。

想定する建物規模は桁行 4.9 m、梁行 2.8 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土したほかに、1 基では土器の破片を投入したような出土状況が見られた。

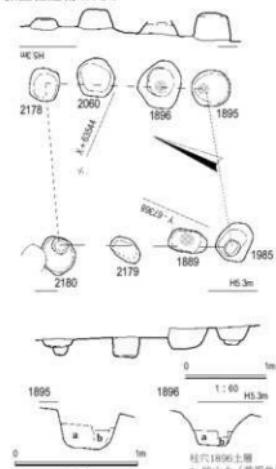
## 掘立柱建物 2130 (図 47・71)

G46-64 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形、一部は重複によるものか不整形状となる。底面に柱圧痕、掘り込みが残る。底面の高低差は小さい。

建物の方向は、桁行 N10.9° W。

図47 掘立柱建物実測図 (19) 1:60, 1:40

## 掘立柱建物 2132



## 掘立柱建物 2133

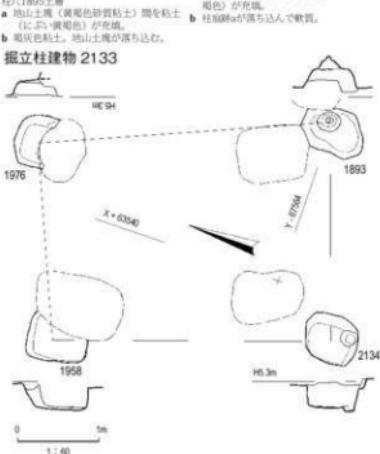


図48 掘立柱建物実測図(20) 1:60, 1:40

0.8 m、柱穴 (1895 ~ 1896) 0.53 m、柱穴 (1896 ~ 2066) 0.82 m、柱穴 (2066 ~ 2178) 0.65 m。

想定する建物規模は桁行 2.2 m、梁行 1.9 m。

柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1297 ~ 1296) 2.05 m、柱穴 (1314 ~ 2176) 2.26 m。

桁行: 柱穴 (1297 ~ 1314) 2.92 m、柱穴 (1294 ~ 2176) 2.7 m。

想定する建物規模は桁行 2.8 m、梁行 2.2 m。

柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

## 掘立柱建物 2131 (図 47)

G46-64 区に位置する。1 × 2 間の建物である。柱穴は不整な円形、橢円形状であるが、1 基が長方形形状で極端に大型である。周辺に同規模の柱穴は見当たらない。

建物の方向は、桁行 N76.1° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2177 ~ 2022) 2.29 m、柱穴 (1873 ~ 1993) 2.25 m、柱穴 (2053 ~ 1991) 2.48 m。

桁行: 柱穴 (2177 ~ 1873) 1.73 m、柱穴 (1873 ~ 2053) 2.04 m、柱穴 (2022 ~ 1993) 1.86 m、柱穴 (1993 ~ 1991) 2.19 m。

想定する建物規模は桁行 4.2 m、梁行 2.6 m。柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2132 (図 48)

G46-75 区に位置する。1 × 3 間と復原する建物である。間柱が狭い間隔で並ぶ。柱穴は不整な円形あるいは橢円形状で一定の形状をとらない。径・長さは 0.4 ~ 0.6 m。柱痕跡、底面に柱圧痕の残る柱穴がある。底面の高さは高低がある。

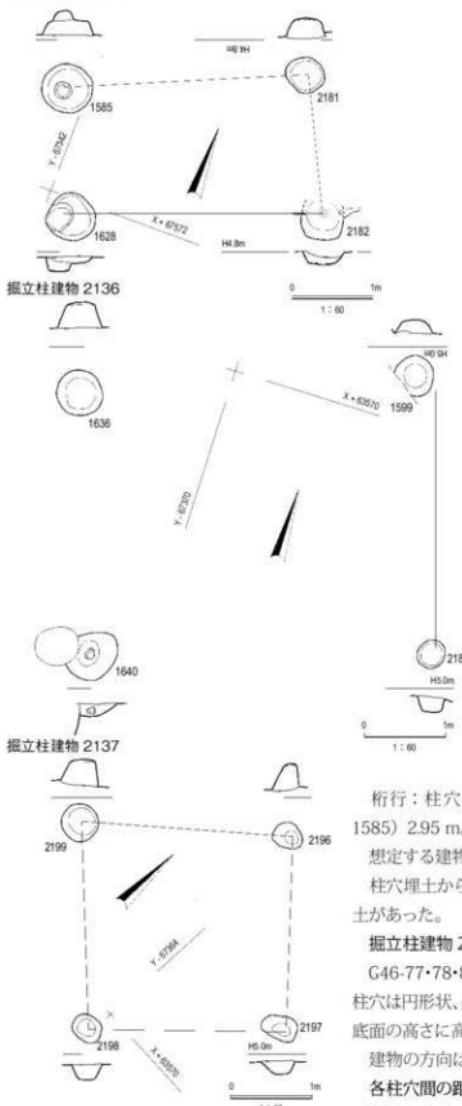
建物の方向は、桁行 N23.0° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1985 ~ 1895) 1.98 m、柱穴 (1839 ~ 1896) 1.96 m、柱穴 (2179 ~ 2066) 2.13 m、柱穴 (2180 ~ 2178) 1.99 m。

桁行: 柱穴 (1985 ~ 1839) 0.25 m、柱穴 (1839 ~ 2179) 0.76 m、柱穴 (2179 ~ 2180) 0.65 m。

## 掘立柱建物 2135



## 掘立柱建物 2137

## 掘立柱建物 2133 (図 48)

G46-74・75 区に位置する。1×1 間の建物である。柱穴は長方形・楕円形状となり、長さ 0.7～0.8 m。底面に柱圧痕もしくは部分的な掘削痕が残る。建物 217 と柱穴が重複しており、それよりも古い。

建物の方向は、桁行 N71.2° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2134～1843) 2.71 m、柱穴 (1958～1976) 2.45 m。

桁行: 柱穴 (2134～1958) 3.34 m、柱穴 (1843～1976) 3.54 m。

想定する建物規模は桁行 3.6 m、梁行 2.6 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2135 (図 49)

G46-88 区に位置する。1×1 間の建物である。柱穴は円形で大小の差がある。径 0.5～0.6 m。柱穴底面に柱圧痕状の窪みがある。底面の高さは南北側で差がある。柱穴が溝 1579 と重複している。また建物 2102 と重複した位置にある。

建物の方向は、桁行 N69.3° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2182～2181) 1.71 m、柱穴 (1628～1585) 1.58 m。

桁行: 柱穴 (2182～1628) 3.2 m、柱穴 (2181～1585) 2.95 m。

想定する建物規模は桁行 3.1 m、梁行 1.7 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土したほかに、玉類の出土があった。

## 掘立柱建物 2136 (図 49)

G46-77・78・87 区に位置する。1×1 間の建物である。柱穴は円形状、長さが 0.3～0.7 m と大小幅がある。柱穴底面の高さに高低の差がある。

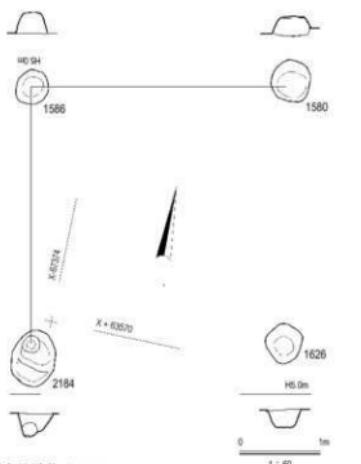
建物の方向は、桁行 N72.8° E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2183～1699) 3.43 m、柱穴 (1640～

図49 掘立柱建物実測図 (21) 1:60

## 掘立柱建物 2138



## 掘立柱建物 2141

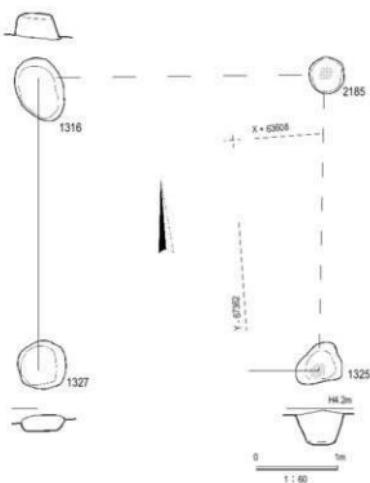


図50 掘立柱建物実測図(22) 1:60

梁行: 柱穴 (1327 ~ 1325) 3.43 m、柱穴 (1316 ~ 2185) 3.53 m。桁行: 柱穴 (1327 ~ 1313) 3.66 m、柱穴 (1325 ~ 2185) 3.36 m。

想定する建物規模は東西 3.6 m、南北 3.6 m。

柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

1636) 3.21 m。

桁行: 柱穴 (2183 ~ 1640) 4.23 m、柱穴 (1699 ~ 1636) 4.14 m。

想定する建物規模は桁行 4.2 m、梁行 3.3 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2137 (図 49)

G46-77-78 区に位置する。1 × 1 間の建物。柱穴は円形、椭円形で、径・長さが 0.4 ~ 0.5 m。

建物の方向は、南北軸 N72.1° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2198 ~ 2197) 2.42 m、柱穴 (2199 ~ 2196) 2.6 m。

桁行: 柱穴 (2198 ~ 2199) 2.52 m、柱穴 (2197 ~ 2196) 2.36 m。

想定する建物規模は東西 2.5 m、南北 2.5 m。

柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

## 掘立柱建物 2138 (図 50)

G46-87-88 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形のほかに大形で椭円形のものがある。前者は径 0.5 m。後者は長さ 0.7 m。後者は段掘り状で、底面にやや深い窪みが残る。

建物の方向は、南北軸 N11.8° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1626 ~ 1580) 3.2 m、柱穴 (2184 ~ 1586) 3.14 m。

桁行: 柱穴 (1626 ~ 1280) 3.1 m、柱穴 (2184 ~ 1586) 3.22 m。

平面形は比較的整った方形となり、想定する建物規模は東西 3.2 m、南北 3.3 m。

柱穴埋土から小量の土器が出土した。

## 掘立柱建物 2141 (図 50)

G47-71 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形、不整な椭円形状で、径・長さが 0.4 ~ 0.5 m、0.8 m となる。

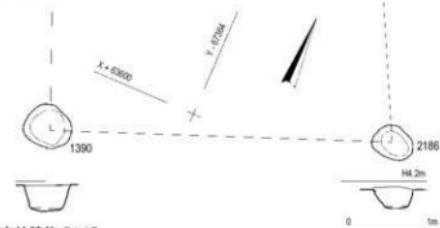
建物の方向は、南北軸 N4.1° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

## 掘立柱建物 2142



## 掘立柱建物 2142



## 掘立柱建物 2143

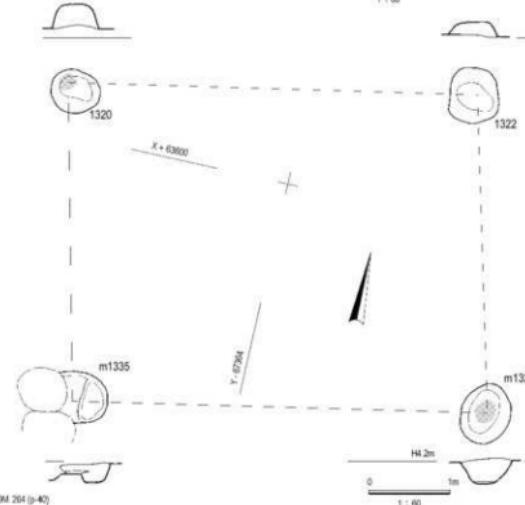


図51 掘立柱建物実測図(23) 1:60

1322) 3.88 m、柱穴 (1335 ~ 1320) 3.86 m。

桁行: 柱穴 (1329 ~ 1335) 5.01 m、柱穴 (1322 ~ 1320) 4.97 m。

想定する建物規模は桁行 5.0 m、梁行 3.9 m。

柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

## 掘立柱建物 2142(図51)

G46-70・G47-71 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形若しくは椭円形状で、径・長さ 0.5 ~ 0.8 m。掘り下げ面で柱痕跡を確認したものがいる。柱穴底面の高さは東が高く西に低い。

建物の方向は、桁行 N66.5° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2186 ~ 1323) 2.95 m、柱穴 (1390 ~ 1317) 2.69 m。

桁行: 柱穴 (2186 ~ 1390) 4.25 m、柱穴 (1323 ~ 1317) 3.96 m。

想定する建物規模は桁行 4.1 m、梁行 2.9 m。  
柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

## 掘立柱建物 2143(図51)

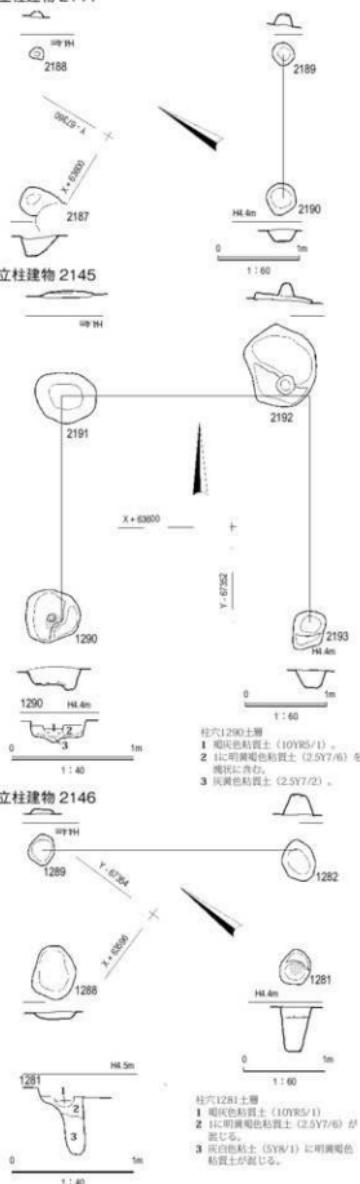
G46-70・G47-71 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は不整な円形状で、径 0.6 ~ 0.7 m。柱穴底面の高さは高低がある。掘り下げ面で柱痕跡を確認した。

建物の方向は、桁行 N77.3° W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1329 ~

## 掘立柱建物 2144



## 掘立柱建物 2144 (図 52)

G46-60・70、G47-61 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は小形の不整な楕円形で、径は 0.2 ~ 0.4 m。底面の高さは 1 基を除き揃っている。

建物の方向は、桁行 N30.9°W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2190 ~ 2189) 1.78m、柱穴 (2187 ~ 2188) 1.78m。

桁行: 柱穴 (2190 ~ 2187) 3.03m、柱穴 (2189 ~ 2188) 3.04m。

想定する建物規模は桁行 3.0 m、梁行 1.8 m。柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

## 掘立柱建物 2145 (図 52)

G46-6・G47-61 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は不整な円形若しくは楕円形で、大小幅がある。径・長さ 0.5 ~ 1.0 m。底面に小穴が残るもの、柱痕跡・柱圧痕が残るものがある。

建物の方向は、南北軸 N1°E。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (2193 ~ 2192) 2.96m、柱穴 (1290 ~ 2191) 2.79m。

桁行: 柱穴 (2193 ~ 1290) 3.15m、柱穴 (2192 ~ 2191) 2.78m。

想定する建物規模は東西 3.0 m、南北 2.9 m。柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

## 掘立柱建物 2146 (図 52)

G46-60 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は不整な楕円形状で大小幅があり、長さ 0.4 ~ 0.7 m。柱穴底面の高低差が大きい。掘り下げ面では柱痕跡を確認した。

建物の方向は、桁行 N36.3°W。

各柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1281 ~ 1282) 1.34m、柱穴 (1288 ~ 1289) 1.54m。

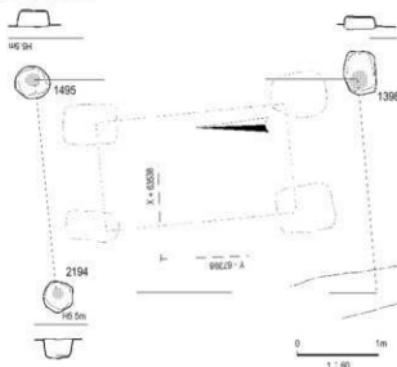
桁行: 柱穴 (1281 ~ 1288) 3m、柱穴 (1282 ~ 1289) 3.15m。

想定する建物規模は桁行 3.1 m、梁行 1.5 m。建物の方向は、桁行 N36.3°W。

柱穴埋土から遺物の出土はなかった。

図52 掘立柱建物実測図 (24) 1:60, 1:40

## 掘立柱建物 2147



## 掘立柱建物 2147 (図 53)

G46-04 区に位置する。1 × 1 間の建物である。柱穴は円形及び楕円形で、径・長さが 0.4 ~ 0.6 m。建物 1399 を対角線上に拡張したような位置に柱穴が配置される。建物 1399 の構造の一部かとも見えるが、柱の形状、規模が異なる。

建物の方向は、桁行 N2.9° W。

計測可能な柱穴間の距離は以下の通り。

梁行: 柱穴 (1495 ~ 2194) 2.66 m。桁行: 柱穴 (1495 ~ 1398) 3.98 m。

想定する建物規模は桁行 4.0 m、梁行 2.6 m。柱穴埋土から小量の土器が出土した。

図53 掘立柱建物実測図 (25) 1:60



図54 掘立柱建物1399 (東から)



図55 掘立柱建物1399 (北から)



図56 振立柱建物1449（北から）



図57 振立柱建物1450（北から）



図58 振立柱建物1451（北から）

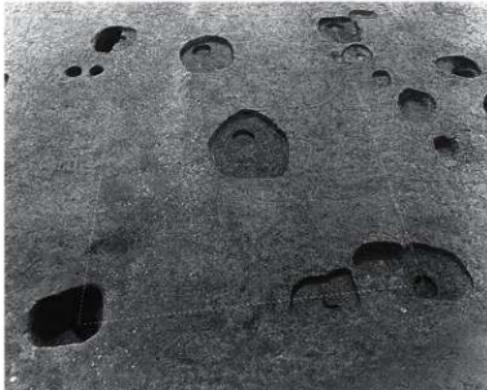


図59 振立柱建物1525（北から）



図60 振立柱建物1571（北から）



図61 振立柱建物1571（東から）



図62 振立柱建物1719（北から）



図63 振立柱建物1734（東から）



図64 振立柱建物1831（北から）



図65 振立柱建物1831（東から）



図66 振立柱建物1832（北から）



図67 振立柱建物1833（北から）

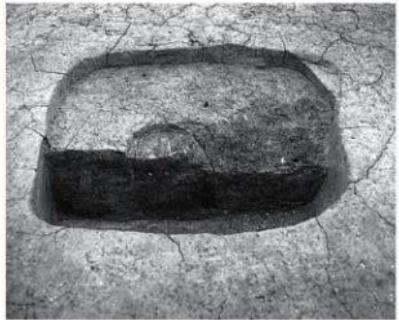


図68 振立柱建物1833 土層1868（南から）

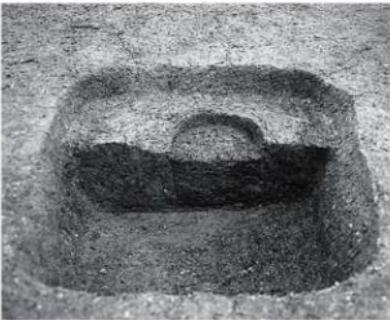


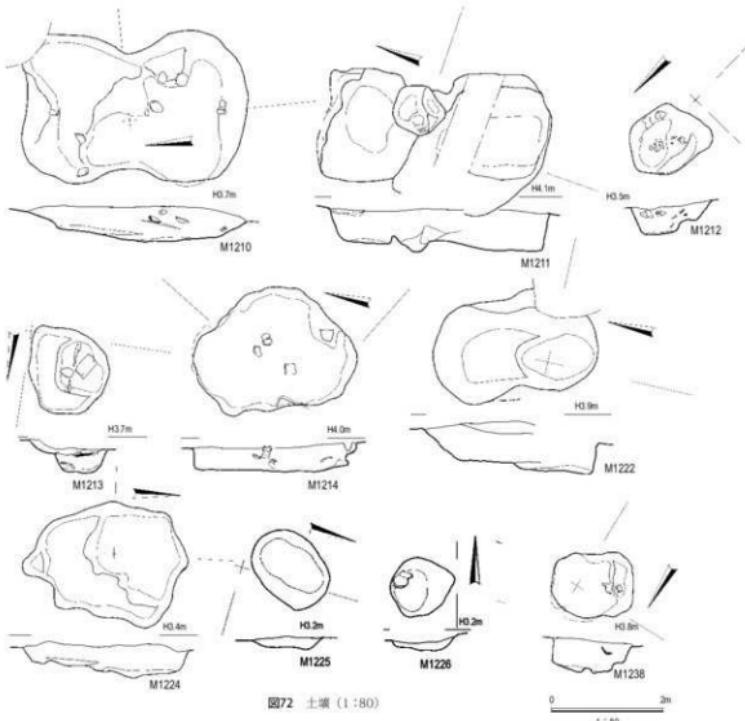
図69 振立柱建物1833 土層1864（南から）



図70 振立柱建物2130（東から）



図71 振立柱建物2101（東から）



## (5)不整な土壤(図72)

平面形、断面形とも不整な土壤状の落ち込みである。分布は調査区の北部分のみ、大半が1区の台地部上に、一部が谷1203西岸にも分布する。断面で肩部がせりだすもの、逆に流失して広く広がるものなど、水の影響を残し、自然に埋没した様態を示すものが多い。覆土も砂層、粘土層の形成が見られる。またクロボク様の黒色土の堆積も顕著である。遺物に後期弥生土器の比較的大きな破片が特徴的である。底部まで掘り下げるもののほか、1区に染み状に広がる褐色土も、同様な土壤状を呈するものと思われる。

土壤1210は長さ2.4m、幅3.8m、深さ0.5m。土壤1211は長さ3.7m、幅2.4m、深さ0.7m。土壤1212は不整な椭円形状で、長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.5m(図73)。

土壤1213は長さ1.5m、幅1.4m、深さ0.4m。槽や板など木質遺物が遺存した(図74)。土壤1214は不整な椭円形状で、壁は部分的に肩部がせりだす。覆土は地山土塊が流れ込んだ状態を示す。長さ2.7m、幅2.0m、深さ0.4m(図75・76)。土壤1222は2基が接続したような形状で、上部が広く漏斗状に開き、自然に埋没した様態を示す。長さ2.7m、幅1.7m、深さ0.6m(図77・78)。土壤1225は径1.0mの不整な円形状、深さ0.3m。土壤1226は長さ2.7m、幅1.6m、深さ0.5m。土壤1238は長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.5m。



図73 土壌1212（東から）



図74 土壌1213（北から）



図75 土壌1214 土剖断面（北東から）



図76 土壌1214（北西から）



図77 土壌1222（東から）



図78 土壌1222（西から）

## 2. 谷部の遺構

### (1) 谷部の調査と溝2195

#### 谷 1203

調査区西半部を北流する谷は、南の大塚 11 次地点の北端部に谷頭があり、今宿五郎江 12 次地点東縁部を抜けて本地点を北流する。先述したようにその先は谷 1202 と合流し、今津湾岸砂丘の後背湿地へと流入していたものと思われる。これを谷 1203 とする。

ここでは、埋没に至るまで間に、溝、杭列・矢板列その他遺構が残されるほかに遺物の投棄といった行為も行われていたようで、大量の土器をはじめとして各種の遺物が出土した。

この区域の基盤層は、花崗岩礫を大量に含み固くしまった砂礫層であるが、谷 1203 はそれを削り込んで形成されている。確認した部分から類推して、調査区以北で一段深く刻み込まれ、それより上流は平坦であると思われる。調査で本来の谷底部まで掘削したのは一部で、他は谷底を埋める礫混じりの粗砂層（13 層 図 79・80）上面までを調査した。この砂層について、掘り下げた範囲で遺構、遺物の出土は確認できなかった。この砂層を基盤として以下述べる遺構の掘削、包含層の形成が行われている。調査区全体の勾配は調査区半ばに変換点があり、ここを境に北側の勾配が緩くなっている。現状地形もそれを反映している。また、この位置に涌水点が見られる。この地形を反映して、両岸の高さも北へ向かって低くなってゆく。

谷 1203 で行われた最も大きな改変（遺構）は、谷底の溝 2195 の掘削である。これにより谷 1203 埋没の過程が大きな影響を被ったものと思われる。調査の過程では、当初溝 2195 を認識することができなかった。谷と溝の埋積層は渾然となっており、現場作業の中で逐次判断することは困難であった。そこで谷部の調査については一括して谷 1203 として取り扱い、記録および、遺物の取上もこれを単位として行った。溝については整理の過程で設定し、溝 2195 として記述する。

谷 1203 の調査にあたって、遺物の出土量が大量であり、出土状況記録に多くを要する状況となつたことから、個体資料については座標上の位置を現場遺物台帳に記載し、他の破片など一括取り上げる遺物については 2 m 格子を単位として同様に記載し取り上げ、極力出土位置の情報を記録するよう努めた。

#### 溝 2195（図 81～94）

谷 1203 底に掘削される溝である。調査区中程の位置から谷 1203 上流に向かって掘削されており、延長は、隣接する今宿五郎江 12 次調査区から、更に南の 15 次地点の東縁部を通り、大塚 11 次地点では台地上を南東方向に横断し、未調査地を間にして今宿五郎江 9 次、同 10 次・13 次地点へと、遺跡の南半部を巡った上で、更に続くものと考えられる。本調査区内では、調査区南辺部と溝北端部では谷東岸に接するように、その中間部では谷西岸に接するような筋に掘削されて、谷の流れの筋に合わせず、曲流する谷の中を更に曲流するような形で掘削されている。

また、北端近くでは陸橋状の未掘部が残り極浅い部位がある。溝底でも段差の残る部位がある。溝の断面形について、原状が遺存する部分は少ないものと思われる。谷底に掘削しているため、掘削直後から溝が谷の流路となってしまい、流水による影響が非常に大きかったことは容易に推測できる。そのような前提で横断面形をみると、逆台形状を呈し、溝北端部で幅 4.0 m 前後、東岸台地からの深さ 1.6 m、中程で幅 3.5 m 前後、深さ 2.0 m、調査区南端部で幅 4.5 m、深さ 2.2 m となる。溝底の幅は全体をみると 1 m 強、南半部でより狭くなる部分がある。溝北側では壁が急で、南半部では緩く広がる形状となっている。ただ、南半部でも溝底近くは急に立ち上がりしている

谷1203土層(1)



81203-A(1)  
10.0m 乾燥地帯、砂質地盤 (0.00m-3.00m)、砂質地盤 (3.00m-10.0m)。  
11.0m カルセ化した砂質地盤 (1.00m-1.50m)、砂質地盤 (1.50m-3.00m)、砂質地盤 (3.00m-10.0m)。  
11.8m 乾燥地帯、砂質地盤 (1.00m-1.50m)、砂質地盤 (1.50m-3.00m)、砂質地盤 (3.00m-10.0m)。  
13.0m 乾燥地帯、砂質地盤 (1.00m-1.50m)、砂質地盤 (1.50m-3.00m)、砂質地盤 (3.00m-10.0m)。  
13.8m 乾燥地帯、砂質地盤 (1.00m-1.50m)、砂質地盤 (1.50m-3.00m)、砂質地盤 (3.00m-10.0m)。  
14.2m 乾燥地帯、砂質地盤 (1.00m-1.50m)、砂質地盤 (1.50m-3.00m)、砂質地盤 (3.00m-10.0m)。

谷1203土層(2)

H.S.m  
X = 0.000

谷1203土層(3)

H.S.m  
X = 0.000

図79 谷1203 土層断面実測図(1) 1:80

谷1203土層(4)

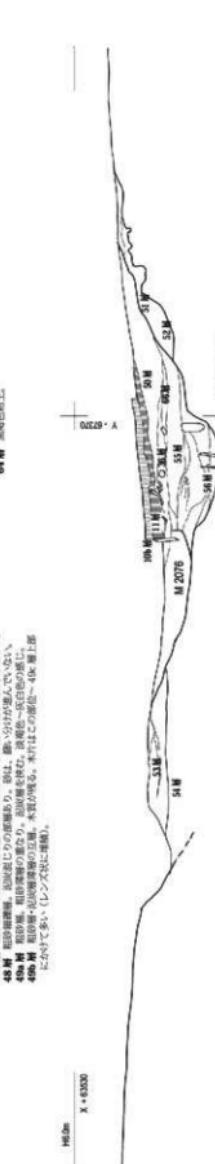
H: 0m  
X: +3500



谷1203土層(4)

36 m 前斜面で灰褐色土、(褐褐色土)に沿って打ち上がる。表面が岩盤化して、これは、泥質岩を示す。褐色の土をもたらすが無くなることから 50 墓(38 墓)  
40 m は、砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.0 ± 0.2。  
41 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
47 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
48 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
49 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
49b m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
49c m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
50 m 地下部分は、(褐色土)である。褐色の土をもたらすが無くなることから 50 墓(38 墓)  
51 m 地下部分は、(褐色土)である。褐色の土をもたらすが無くなることから 50 墓(38 墓)  
52 m シルト質シルト土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
61 m 黒褐色土。

図80 谷1203 土層断面図(2) 1:80



谷1203土層(5)

36 m 前斜面で灰褐色土、(褐褐色土)に沿って打ち上がる。表面が岩盤化して、これは、泥質岩を示す。褐色の土をもたらすが無くなることから 50 墓(38 墓)  
40 m は、砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.0 ± 0.2。  
41 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
47 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
48 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
49 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
49b m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
49c m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、109.2 ± 0.2。  
50 m 地下部分は、(褐色土)である。褐色の土をもたらすが無くなることから 50 墓(38 墓)  
51 m 地下部分は、(褐色土)である。褐色の土をもたらすが無くなることから 50 墓(38 墓)  
52 m シルト質シルト土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
61 m 黒褐色土。

谷1203土層(6)



51 m 地下部分は、(褐色土)である。褐色の土をもたらすが無くなることから 50 墓(38 墓)  
52 m シルト質シルト土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
53 m 黒褐色土。  
54 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
55 m 黒褐色土。  
56 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
57 m 黒褐色土。  
58 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
59 m 黒褐色土。  
60 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
61 m 黒褐色土。  
62 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
63 m 黒褐色土。  
64 m 砂質土である。表面は、(褐色土)である。底面標高、113.8 ± 0.2。  
65 m 黒褐色土。

0 2m  
0 1:80

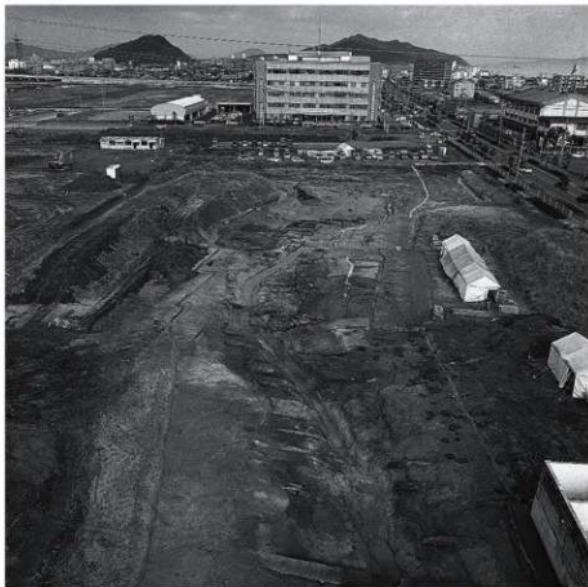


図81 谷1203（南から）

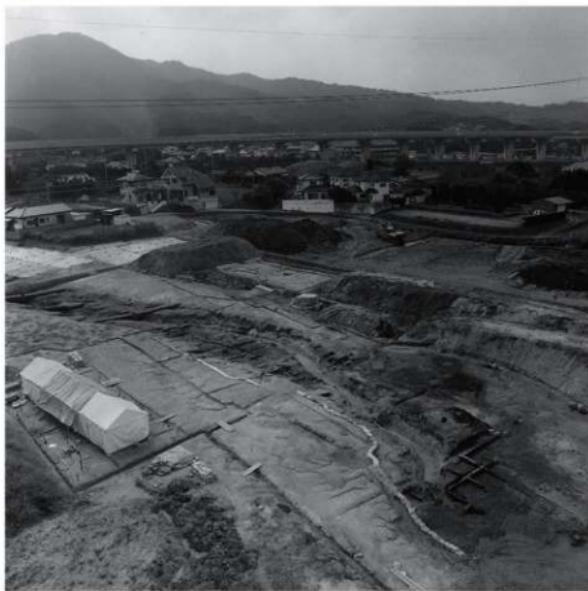


図82 谷1203（北東から）



図83 溝2195 南半部完成（北から）



図84 溝2195 完成（北から）



図85 谷部1203 完成 (4区南から)



図86 溝2195 段差部 (G46-84 区北から)



図87 溝2195 完成 (2・3区南から)



図88 溝2195 土層（G46-96 区北面、南から）



図89 溝2195 土層（G46-9535/31 北面、南から）



図90 溝2195 土層（G46-83 北面、南から）



図91 溝2195 土層（G46-73.83 南面、北から）



図92 溝2195 北端深部（2区、北から）



図93 溝2195 土層（G46-99 北面、南から）



図94 溝2195 土層（G46-97 南面、北東から）

谷 1203・溝 2195 土層(図  
79・80)

谷 1203 及び溝 2195 を埋める層は一体のものとなっているので、ここで一括する。調査では、10m 間隔を基本に、東西方向の土層断面を記録した。また、必要に応じて 2m 間隔でも記録した。図 79・80 に北から順に土層断面図を示す。

谷部を最終的に埋積するのは 10b 層・11 層である。この段階で、谷は浅い窪みとなり、勾配も緩いためか泥炭質の黒褐色粘土層となっている。この層の生成が始まる時点での溝 2195 の痕跡は残っていない。これより上位の層は先述したように台地部にも広がり、現況地形の基盤層となるものである。10b 層は、11 層が上位層の影響を受けて粗砂を含んだものと見え、11 層の分布しない区域もある(土層 2 等)。10b 層・11 層下部から遺物の大量出土が始まる。両層で調査出土土器重量の 29% を占める。谷の岸部では、投棄した様な状態での出土があった。土器の分布は調査 1 区の北半で終わる。

溝の掘削されていない北部(土層 1)ではこの直下、薄い有機物混じりの 19・23 層を挟んで谷底堆積層の粗砂層(13 層)となる。これより南調査区中央部までは 19 層が一定の厚さで分布し、

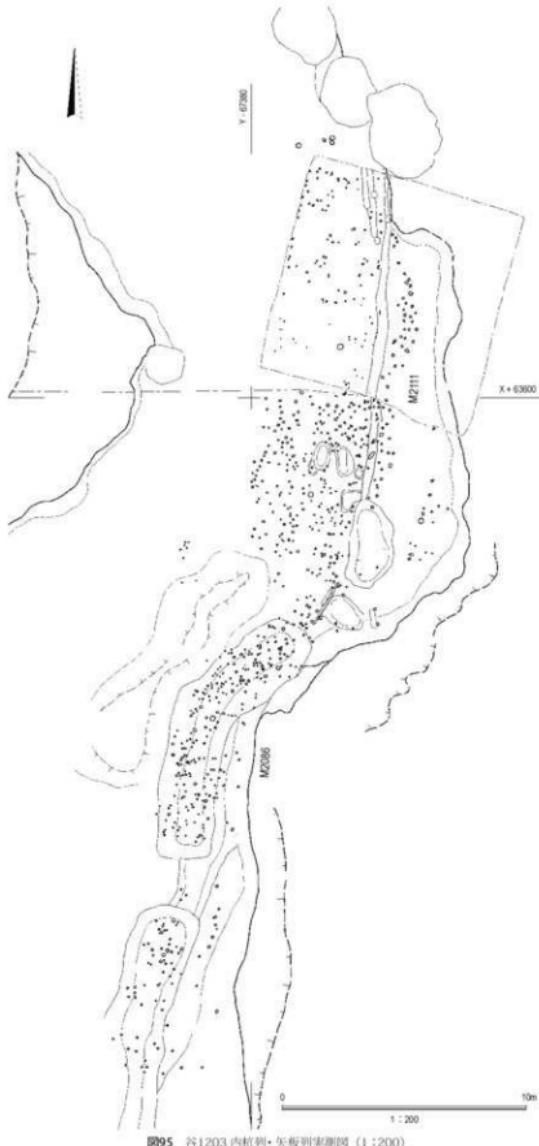


図95 谷1203 内軒列・矢板列実測図(1:200)

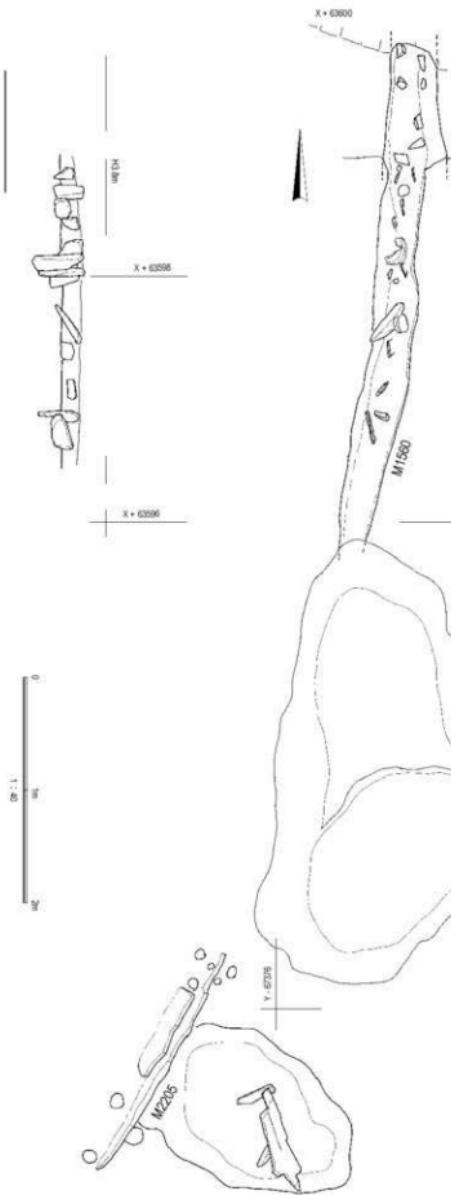


図96 矢板列1560・2205実測図(1:40)

下位に23層が現れる。G46-80I区では、これが凹地1391の覆土となる。圧潰した土器の混じる大量の土器の他に、木器類もよく遺存している。

調査区南部の谷1203東岸寄りに分布する36層(断面4・5)は11層直下に位置し、土器層といって良い程の密度をもって遺物が出土する部位がある。東岸肩から生成する50層に漸移するような関係にあり、一連のものか。調査区中央部G46-96区を中心として谷1203東岸に分布する39層と同層と考えられる。ここでは、溝2195は谷西岸に沿っており、それと谷と右岸との間の谷底面上に広く広がる。出土する土器は後期弥生土器が大半である。

この区域では39層の下位に、谷1203の肩部を埋めるようにして、谷底13層上に41層・42層が分布する。出土土器は完形土器を含む中期弥生土器である。同様な層がG46-80区でも東岸から谷底に形成されているほかに、地点的に東岸部に遺存している。

谷1203西岸でも、11層下の肩部から流入堆積する44層下面から集中して遺物出土があり、36層・39層といった包含層に対応する可能性がある。

溝2195 以上の層より下位層には、溝2195の埋積層及び、溝2195の構築に際して形成された層がある。溝2195北半では23層が上部を覆い、下部は溝底まで黒色粘土層(57層)で埋まっている(土層2・3)。

南半部の溝の下部は粘土層であるが、泥炭質で、上半部は粗砂、砂礫層を挟んだり、両者の薄層が互層を成すなどしている(49a～49c層図)

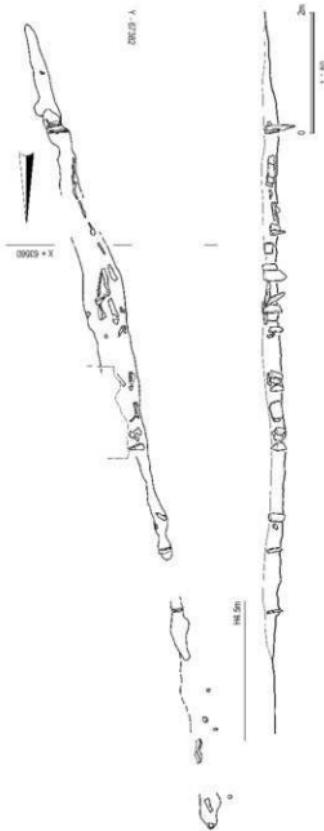


図97 矢板列2028 (1:80)

陸橋部では殆ど打ち込まれていない等、溝が残す凹地を意識したものとみえる。

#### 杭列 2021 (図 95)

溝 2195 より北 G46-80 区・G47-81 区に分布する。G47-81 区の大部分は今宿五郎江 4 次調査区となるが、図を合成して示す。杭は 11 層下の谷底 13 層上面で検出した。やはり乱杭状であるが、分布の西辺部、東辺部で蛇行する杭列を比較的長い距離確認することができる。西辺部は谷の中央部、東辺部は谷東岸湾曲部を塞ぐような位置に配列している。

#### 矢板列 1560 (図 95・96・99・100・101)

G 46-80 区に位置する。杭列 2111 の東辺に沿うような位置にあり、4 次調査区の SD015 から続くものである。細い溝状の堀方に矢板を打ち込んでいる。調査では、まばらに浅く残る矢板を検出した。

80 土層 4～6)。48 層はこれらの上にあって、細縫を顯著に含む。南端部溝底に堆積する 67 層は灰色粘土の堆積層で、泥炭質の生成が始まる以前の堆積とみられる。

G46-99 区の西岸、G46-85 区・95 区の東西岸部に溝 2195 を埋積する層とは不整合で、谷底 13 層の上に載る層が残っている。周囲の地山層、谷底の堆積層を塊状に含んでいることから、溝 2195 掘削に伴う廃土を積んだものと考えることができる。特に調査区南端部では、溝の東岸は人為的に構築された様な景観となっていたものと想像できる。これらの層からは弥生中期土器が投棄された様な状態で出土した。また G46-99 区では埋積された状態で弥生土器の出土があった（遺構 1716～1718）。

#### (2) 谷部の遺構

以下、溝 2195 の外に谷 1203 内に残された遺構について、杭・矢板列、井戸、土器埋置、凹地、溝、土壤の順に報告する。

#### 杭列 2086 (図 95)

杭は、G46-98 区から北へ G46-80 区までの範囲に密集している。このうち溝 2195 と重なる位置では、溝の範囲に集中して打ち込まれている。この部分を杭列 2086 とする。11 層下の砂層、泥炭層で検出した。11 層には杭の痕跡は残っていない。杭径には大小幅があるが、概して太い印象を受ける。最も太いものは径 20cm ほどある。また材の又部も残して打ち込んでおり、杭としての加工を最小限にとどめている。部分的に短い距離で列をなす部分があるが、全体をみると不規則で、打ち込みも斜めを向くもの等、その方向はまちまちで、いわゆる乱杭の状態を示している。検出位置からして溝 2195 の埋積が進んだ段階で打設したものであるが、



図98 坑列2111（東から）



図99 矢板列1560（南から）



図100 矢板列1560 断面（西から）



図101 道構1557（北から）



図102 矢板列2028（南から）



図103 矢板列2028（南西から）

埋土中から木材など木質遺物、土器片が出土した。更にやや湾曲して続く南の延長上では杭で支持された板材が東へ倒れ込んだ状態で出土した。また、これと対する位置で矢板とともに板材が同じ方向に倒れ込んだ状態で出土した（遺構 1557 図 101）。矢板列 1561 は、凹地 1391 と重複して、一部を削られており、凹地 1391 より古い。

#### 矢板列 2030（図 97・101・102）

G46-96 区・G46-97 区で検出した。矢板列 1560 と同様、細い溝状の堀方に矢板基部近くが遺存している。尖端を作り出すものとそうでないものとがある。一部では隙間なく打設されている。直線状に 11 m を確認した。更に、北へ延長した位置となる G46-9821 区北壁土層断面に同様な堀方が現れており、ここまででは続くものとわかる。この位置から北は溝 2195 と重なるが、そこでは矢板列を検出することはできなかった。

#### 井戸 2029（図 104～107）

G46-96 区で、溝 2195 下部の掘り下げ中に検出した。溝 2195 溝底より西岸に寄った位置に、おそらく鉢形に開く堀方を掘削したものとみえる。堀方底面から 0.3 m 程上の位置に、板材を井桁に組んで据えている。板材は長さ 100～110cm、幅 20cm 程ある。板の端から 10cm 前後の位置の片側を切欠き、まず向かい合う位置に据えた後、同様な切欠きを行った板材を、直交する位置に組み付けて井戸側としたものである。材は広葉樹と見える。調査で出土したのは 1 段である。

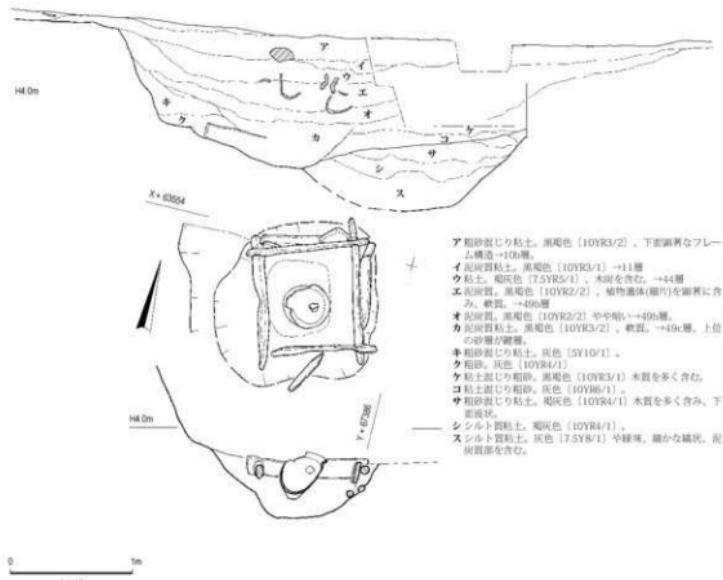


図104 井戸2029 実測図 (1:40)



図105 井戸2029 断面・井戸側検出状況



図106 井戸2029（西から）



図107 井戸2029 離方

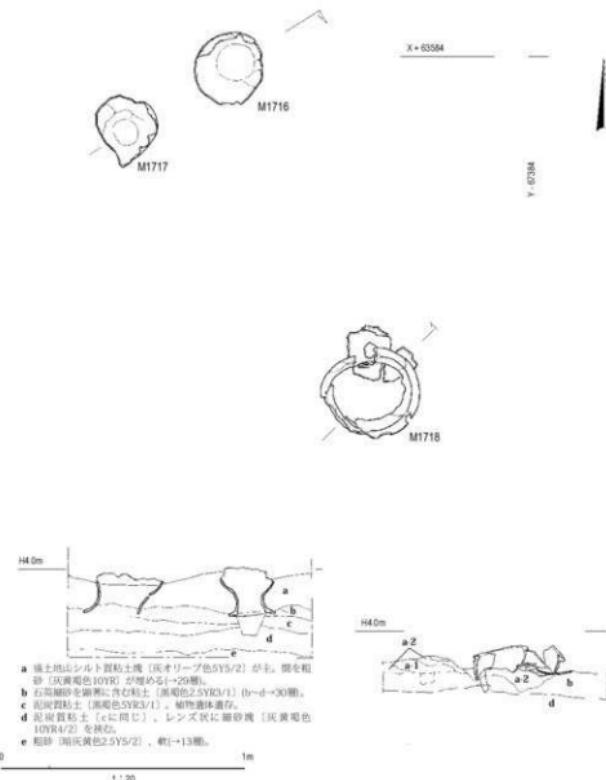


図108 土器埋置1716～1718実測図(1:20)

井桁上端よりやや上位の井戸中央で弥生土器を検出した。片側の上部1/3を欠き、口縁部径35cm、器高40cmほどの大きさで、ほぼ直立した状態で出土した。内部から手捏ね土器が出土した。ほかに木材、土器片が土器内、井戸内から出土した。

井戸下部は暗灰褐色粘土、灰色粘土で埋まる。それより上は溝埋積土と変わらない泥炭質の粘質土で埋まっていた。このため井桁の検出があるまで、その存在に気づかなかった。図は縮尺20分の1図と40分の1図を合成している。井戸側の北東端が土層壁にかかるような位置にあったが、堀方については判別できなかった。土層図で谷1203の肩から急に段落ちしている部分があり、これが井戸掘方か。堀方埋土が掘り込まれた様な状態で残っていること、井戸側が1段である点から、現況は、上部が後に抜き取られた結果であるという可能性も考えられる。掘り込み面については、11層生成以前とは言えるが、溝埋没のどの段階かを確認することはできなかった。

#### 土器埋置1716-1717-1719(図108～1119)

G46-99区の溝2195西岸に位置する。溝掘削残土とする29層上面で検出した。



図109 土器埋置1716・1717（北から）



図110 土器埋置1716（北から）



図111 土器埋置1717（北から）

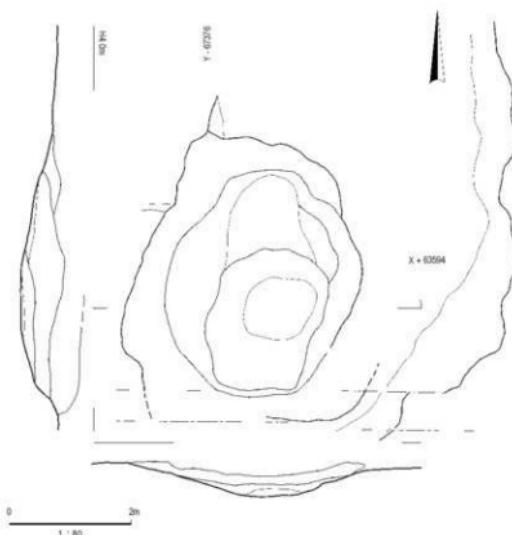


図112 土器埋置1391(凹地1203内)

土器埋置1716・1717では壺が口縁部を下にした状態で、1718では甕が口縁部を上にした状態で出土した。

それぞれ検出面から深さ0.2m位置まで遺存する。29層下で13層直上の30層(泥炭質粘土互層)上に置いた様な状態で29層中に埋まっていた。堀方中に据えたことを考えて平面、断面で精査したが、検出することはできなかった。土器内部も29層で埋まっており、29層盛土時に据えて埋め込んだものと考えられる。

埋置された土器は1716では口縁部径20cm前後で鋤先口縁の壺、同1717では口縁部径25cm前後で外反する口縁の広口壺を使用し、1718では口縁部径40cm前後で鋤先口縁の上半部とその下に敷くようにして底部が出土した。土器埋置1716・1717ではともに下半部を欠いているが、1718の口縁部を残すことから考えると、底部を打ち欠いた状態で埋置されたものか。

#### 凹地1391(図1122～116)

凹地とするものは、谷1203底で2基、2195掘り下げ中に部分的に2基を調査した。

凹地1391は、46-80区に位置する。谷1203が大きく屈曲し、北西方向へ流れを変える地点の攻撃斜面側に位置する。溝2195北端からの延長線上にあたる。19層調査時、流木など木質遺物が集中して出土する範囲を認めた。更に掘り下げたところ、谷底砂層13層を挟って緩く窪む凹地部に遺物が厚く重なった状態で堆積しているものとわかった。凹地は平面で北東方向へ軸をもつ不整な橢円形状を呈し、広く開く皿状の断面である。長軸長4.6m、幅3.7m、13層上面からの深さ0.8mを測る。本来の肩部はより上位にある可能性があるが、確認はできなかった。

図113・114に上部の出土状況を、図115・116に下部の出土状況を示す。遺物で顕著なものは大



図113 四地1391 上部遺物出土状況（南から）



図114 四地1391 上部遺物出土状況（西から）



図115 凹地1391 下部遺物出土状況（西から）



図116 凹地1391 下部遺物出土状況（北から）

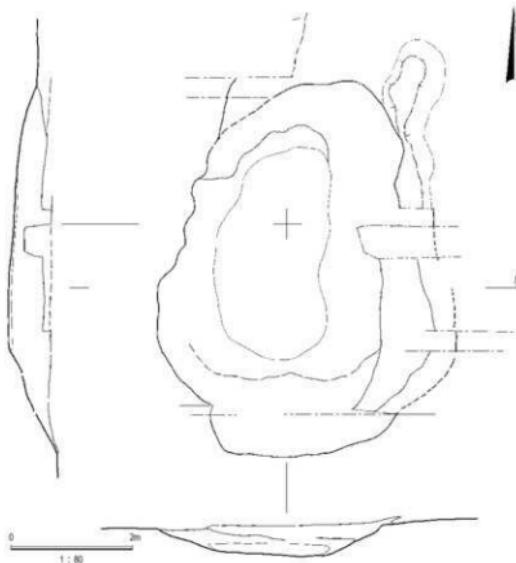


図117 凹地1565 実測図 (1:80)

量の木質遺物で、多くは流木などの自然遺物である。混じって割材などの木材も多いが、なかに農具、漁撈具、容器、建築部材等が出土した。作業台といった重量のある遺物も混じる。木器では柄状態のエブリが出土した。柄は装着部近くで折れていた。土器は木質遺物集中部より上位にまとまりを持って出土するものがあるが、それ以外は主に破片の出土であった。木質遺物の向きはまちまちで、各遺物で特定の器種などが離まるなど、出土状態に一定の傾向を見て取ることはできなかった。また、凹地の南端部は、上流側から流れ込んだ土器片の層で一部覆われた状態となっていた。

#### 凹地 1565 (図 117 ~ 121)

調査区中央 46-97 区に位置する。谷 1203 底に溝 2195 が弧状に掘削されて、谷底の平坦部が三日月状に残る位置にあたる。ここでは、11 層下に谷東岸から 39 層が谷中央部付近まで分布している。それの下位、19 層と考えた層で木質遺物のまとまりを確認し、さらに掘り下げたところ、谷底砂層 13 層および埋没した溝 2195 の一部を抉って緩く窪む凹地を検出した。

凹地は平面不整な橢円形状で、南北に長軸を持つ。長さ 6.0 m、幅 4.7 m、深さは確認面から 0.6 m を測る。底部は平坦でその南北長 3.4 m、断面は大きく開く皿状となっている。

図 118 に上部の遺物出土状況、119・120 に下部の、121 に完掘状況を示す。木質遺物集中部の上位は 39 層であり、その圧潰状態の土器が直接載るような関係で分布している。木質遺物の多くは樹枝等で、次いで割材などの木材が多い。木器は農具、斧柄、容器、机、建築部材等が出土した。他に弥生土器、石器類が出土した。ここでも、遺物の出土状況には、一定の規則性或いは偏りは認められず、一気に堆積した様な様態である。

ところで、凹地 1565 では東西の肩部に土手状の高まりが残っていた。土層断面図 (図 79- 土層 3)



図118 凹地1565 植出状況（東から）



図119 凹地1565 下部遺物出土状況（東から）



図120 四地1565 下部遺物出土状況（北から）



図121 四地1565 完留（東から）

で58層とする、粘土層というよりは粘土塊混じりの砂礫層で、多数の土器片を含んで、水流による洗い出し層と見える。このようなあり方から、凹地1565は水流の穿掘により形成されたもので、58層はそれによる搔き出しの結果と考えることができる。同様に、周間に砂礫層は残らないが、凹地1391も、形状、規模、位置から、溝2195を超えてきた、谷1203の水流の穿掘作用により形成されたものと見ることができる。形成された凹地に、遺物が人為体に投入されたのか否かということについても、遺物の出土状況に規則性、内容に偏在性がないこと、木質遺物に多くの樹枝など自然に生成したと考えられる資料が混じることから、これにも水流による堆積の可能性が考えられる。

#### 凹地2025（図122）

G46-84区に位置する。溝2195の東岸で谷底13層、溝2195の49b層を切り込んでいる。36層・50層直下を検出面とする。溝2195埋積層掘り下げ途中に検出したもので、形状は部分的にしか確認することができなかった。復原される平面形は、溝2195に沿って北西方向に長軸をもつ不整な橢円形状で、浅い皿状の凹地と見られる。長さ4.5m、幅3.0mと推測する。

覆土は泥炭質の粘土で19層、凹地1565覆土と同性状である。木質遺物がかたまって出土したなかから農具、漁撈具が出土した。

#### 凹地2076（図80）

G46-83区に位置する。土層観察用畦の掘り下げ中に検出したものである。11層直下を検出面とし、溝2195西岸を抉り込んで形成されている。推測する形状は不整な橢円形状、西は緩く立ち上がるが、東側は急な壁となって立ち上がっている。覆土は泥炭質の粘土で、19層、凹地1565と性状が同じで



図122 凹地2025（北から）

ある。木質遺物中から、農具、狩猟具が出土した。

凹地 2025・2076 は溝 2195 内で検出した。谷底堆積層上で検出した凹地 1391・1565 とは位置が異なるが、形状、遺物の出土状況、覆土は共通していることから、同様に流水による穿掘、木質遺物の堆積を考えることができる。別に土壤とする落ち込みを溝 1204 や 9 次地点、10 次地点で確認したが、深く掘り込んで、壁の立ち上がりが明瞭、平面形状も整っているなどの差異がある。

凹地 2025・2076 例は一部が溝岸部を削り込む、あるいは断面の観察の機会があったことによってその存在、形状等を確認することができた。このような位置にない、溝中央部に形成されるものについては、調査時、遺物の密度の変化としてのみ見えていた可能性もある。いずれにしても、これらの凹地が形成されたのは、溝 2195 の埋積が進みその形跡が谷 1203 の中に埋没しつつある段階となる。

#### 溝 1561（図 123）

G46-07 区、谷 1203 西岸谷に沿う位置にあり、南北方向に走る。10b 層直下で検出した。断面が弧状で浅く、南端部で鍵の手に屈曲して谷 1203 へ合流する。北方向は鉄塔建設のため破壊されている。幅 1.7 m、深さ 0.2 m を測る。覆土はやや灰味を感じる黒褐色粘土（61 層）で、中位に灰白色粘土層を挟む。

主に溝底面から遺物が出土した。部分的に細片化した土器片が密集して投棄されたような状態で出土した。後期弥生土器が含まれる。

#### 溝 1567（図 125～127）

G46-83 区から G46-95 区に位置する。谷 1203 西岸裾を谷に沿った方向に走る、南は調査区外へ伸



図123 溝1561（北から）



図124 溝1741 遺物出土状況（北から）



図125 溝1567（北から）



図126 溝1567（南から）



図127 溝1567（西から）



図128 溝1741（東から）

びるが、北は G46-95 区で谷の肩部に向かって細くなり終わる。断面形は弧状で、深さ 0.5 m、幅は一定しないが、広い位置で 2.5 m。溝の埋積土は、上部が灰黄褐色粘土（46 層）、下部は黒褐色粘土（47 層）である。遺物は下部に多く出土した。底面では土器が密集して出土する部分があり、投棄されたものか。後期弥生土器に中期弥生土器が混じって出土した。

#### 溝 1741 (図 124・128)

G46-85 区に位置する。谷東岸裾部で谷に沿った方向に走る。南の延長は詳細を明らかにできなかったが、G46-84 内で終わっている。北方向の延長は西岸側が不明瞭となり確認できなかった。上位層堆積前に削平されたものか。木炭を含んだ黒褐色粘土（図 80 土層 4-63 層）で埋まる。上部から下部まで遺物が出土するが、底面、壁に沿い集中して出土し、投棄されたような状態を示す。

**溝 1561・1567-1741 の形成** ここで、溝 1561・1567・1741 の成り立ちを見てみると。谷底にある溝 1567・1741 はそれぞれ片側が谷の岸部の立ち上がりに一致して、壁は砂礫層となる。対する側はそれぞれ谷の中心側となるが溝 1567 は、53 層（図 80・土層 4・5）が、溝 1741 では 51 層が現れている。さらに谷 1203 の肩部にある溝 1561 も、同様に谷に向かって外側の壁が基盤層、内側が 29 層となる。

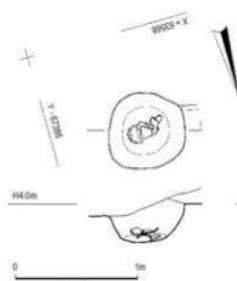


図129 土壌2026 (1:40)

29 層・51 層・53 層はいずれも溝 2195 掘削時の廃土層とみる層であり、29 層のあり方から見て、溝の肩部に積み上げられたものと考えると、以上の溝はそれぞれ盛土の後背部に形成された凹地であったものと考えられる。以上、溝 1561・1567・1471 は意図的に掘削されたものではなく、別の目的で行われた工事の結果形成されたものである。その埋没の早い段階で土器等の投棄が行われたものと考えられる。

#### 土壌 2026 (図 129・130)

G46-97 区に位置する。溝 2195 掘り下げ中西岸肩部付近の 23 層下面で検出した。溝 2195 埋積層中位となる。

平面円形で断面逆台形状、径 0.7 m、深さ 0.3 m。

覆土は暗褐色泥炭質粘土で軟質、粗砂薄層の流れ込みがみられる。底部から弥生土器甕下半部が破片で出土した。



図130 土壌2026 (北から)

### III. おわりに

今宿五郎江第11次調査地は、遺跡西半部の平坦な台地上に立地し、南へ入り込む谷により区画されている。調査面は緩く北へ傾斜し、調査区南北端の比高は2m強あるが、調査区中程に地形変換点があり、北半部の勾配がやや緩い。

調査区内の西寄り位置を、谷1203が北へ向かって貫いている。調査区東縁部にも谷が入り、調査区北半部は東の台地と隔てられている。谷1203の岸の高さは北端部で0.4m、南端部で0.7m程である。

遺構の大部分は、東側台地に分布している。検出した主な遺構は、掘立柱建物、弧状の溝、不整な土壙がある。谷には溝が掘削され、以外の明瞭な遺構はわずかである。井戸、土壙を確認した。外に、遺物の投棄など、出土状況が人為的な関わりを示すものは、重層関係を示しながら各所に広がっていた。

#### 掘立柱建物

掘立柱建物は不確実なものも含め48棟を復原した。柱の構成で、東側台地の南半部に分布する。柱間の構成からみると1×1間とするもの34棟。以下、1×2間が9棟、2×3間が2棟、1×3間が1棟、その他2棟という構成である。その他とするものは、一部の堀方が布掘りで、間柱を多く持つ構成とした建物である。

建物の時期は、隣接する2次調査の成果からすると、中世の建物を含む可能性がある。それを置いて、想定建物規模により寸法をみると、1×1間建物は梁行1~3.5m、桁行1.5~4mの範囲に分布する。1×2間の建物では梁行2~4m、桁行3~5mとなる。梁行の小さいものは1×1間建物のみである。今回調査では竪穴住居を確認できなかった。隣接する2次調査地点でも同様、確認していない。今宿五郎江遺跡内で竪穴住居の調査既報告例は、9次地点の1例のみである。床面のみ遺存する長方形住居で、柱穴は検出されなかった。11次調査区では削平のため柱穴のみが遺存する可能性もあるが、調査中それとわからるものを見ることはできなかった。

#### 溝2195

溝2195は、谷1203底に掘削されるが、単に掘削だけでなく、発生した廃土により谷内を大きく改変している。掘削廃土は北半部では29層とし、南半部溝東岸側では51層、西岸側では53層とした。溝北端部西岸では溝脇の谷底に積み上げた状態が残っている。ここではそれに埋置された土器の出土があった(遺構1716~1718)。築造当初から、どの程度が流失したかはわからないが、谷1203の埋没に従い現状を留めている。

調査区中央部、G46-97区を中心とした区域は、凹地1565の形成に見られるように、流水による削平が活発に進行したものである。ここでは断片的に29層の分布が見て取れるが、面的広がりとしては確認が難しい。対する西岸では、谷1203西岸に沿った溝1561として調査したものが、溝2195掘削廃土と共に形成された凹地に由来するものであることが分かった。

G16-85・95区以南では同様の状況が谷底でみられ、西岸部では53層背後の溝1567、東岸部では溝1741を形成している。

さらにG46-75以南の東岸では、廃土は谷肩部の高さまで残っており、意図的に積み上げて地盤高に合わせて整地したものかもしれない。南に接する12次調査区では、東岸部は調査区外となっているが、西岸部を調査している。調査中の写真をみると西岸部にも掘削廃土を盛り上げているように見える。

検出時の溝2195は上部が大きく開いた断面形となっているが、溝壁面が埋没までの過程で崩落した結果と考えられる。溝北端部、或いは溝の底部近くではより急角度で立ち上がっており、これが当初の断面の状態を残すものとしてその角度で現岸部高まで延長してみると、調査区南端部土層図上で、幅2.8m程の溝幅となる。

11次調査区南辺部から南。大塚11次調査区に現れる谷頭に至るまで、谷1203の幅が狭まる区间では、廃土を盛り上げて整地して、より溝としての形態を整えようとしたものかもしれない(図131)。

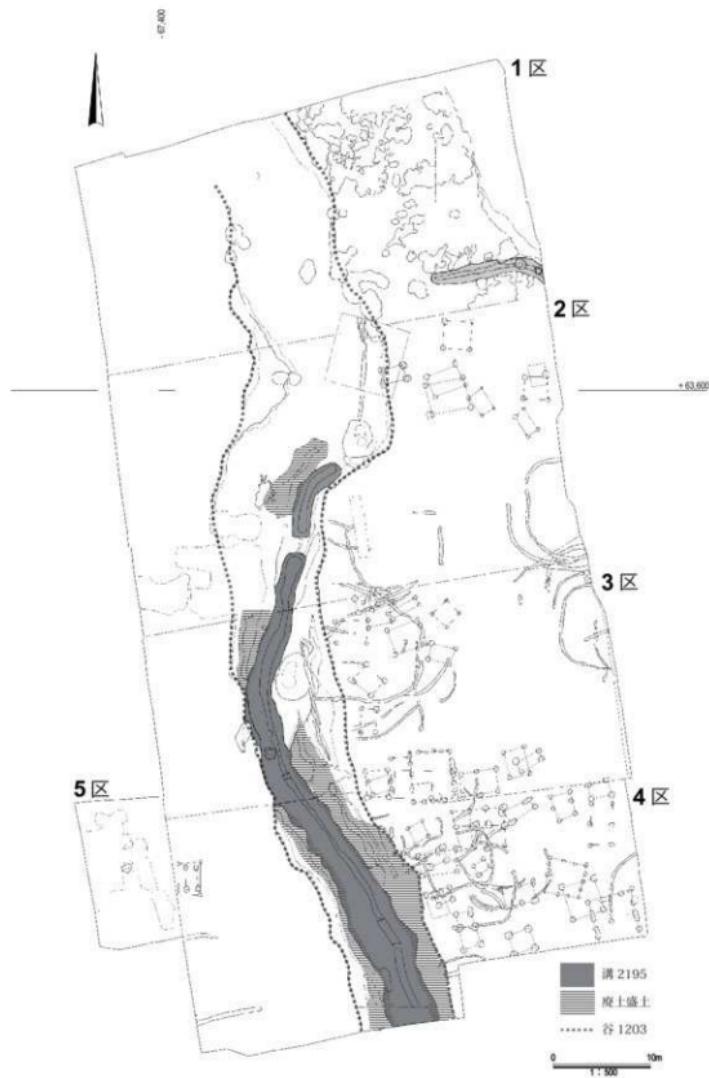


図131 今宿五郎江11次地点遺構分布図(1:500)

#### 付図 今宿五郎江遺跡第11次調査区全体図 (1:200)

